

J2.99:8

8 of 20

Sept. 1944

Vol. 2, no. 7

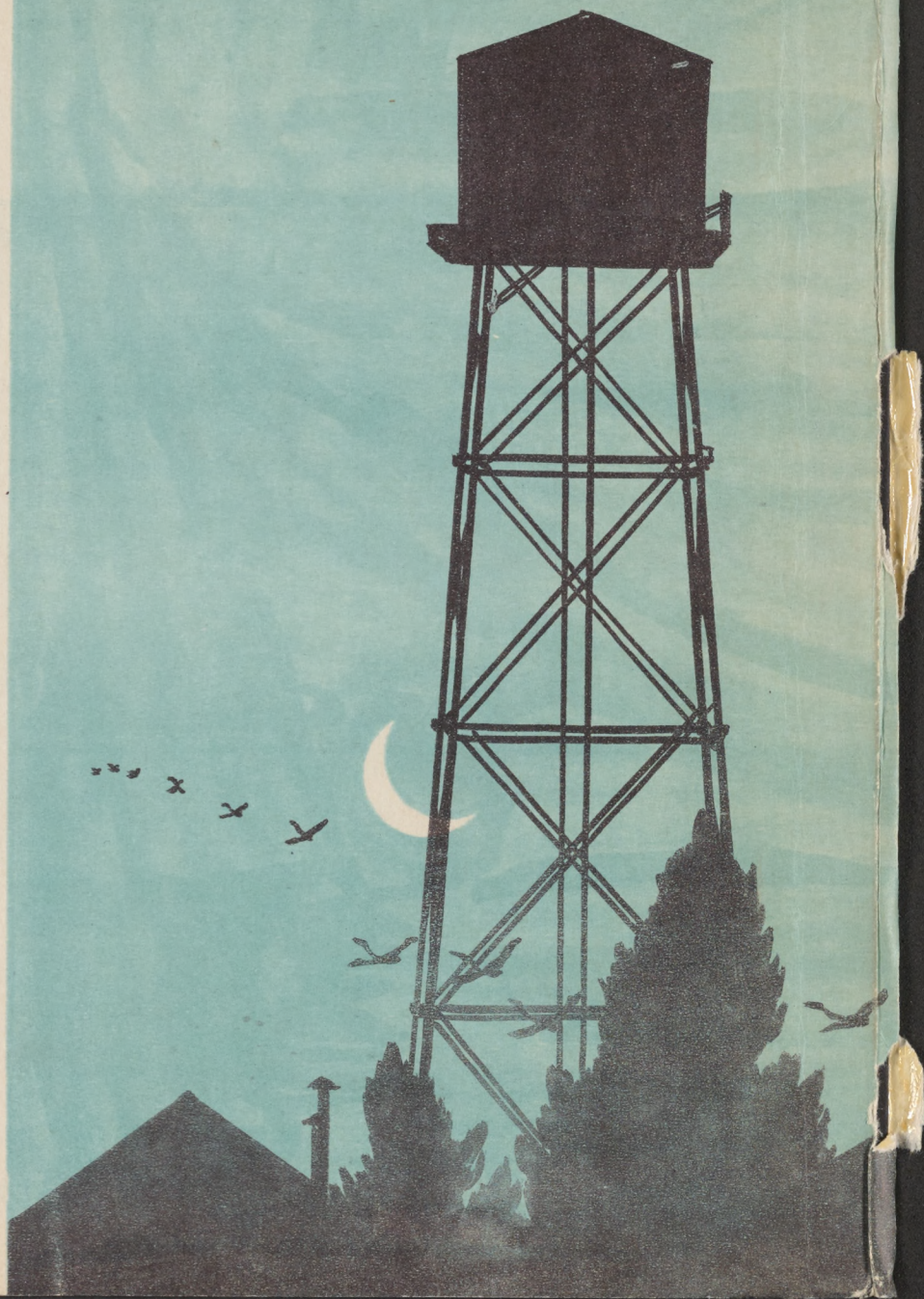
67/14  
C



ポスト  
子

観

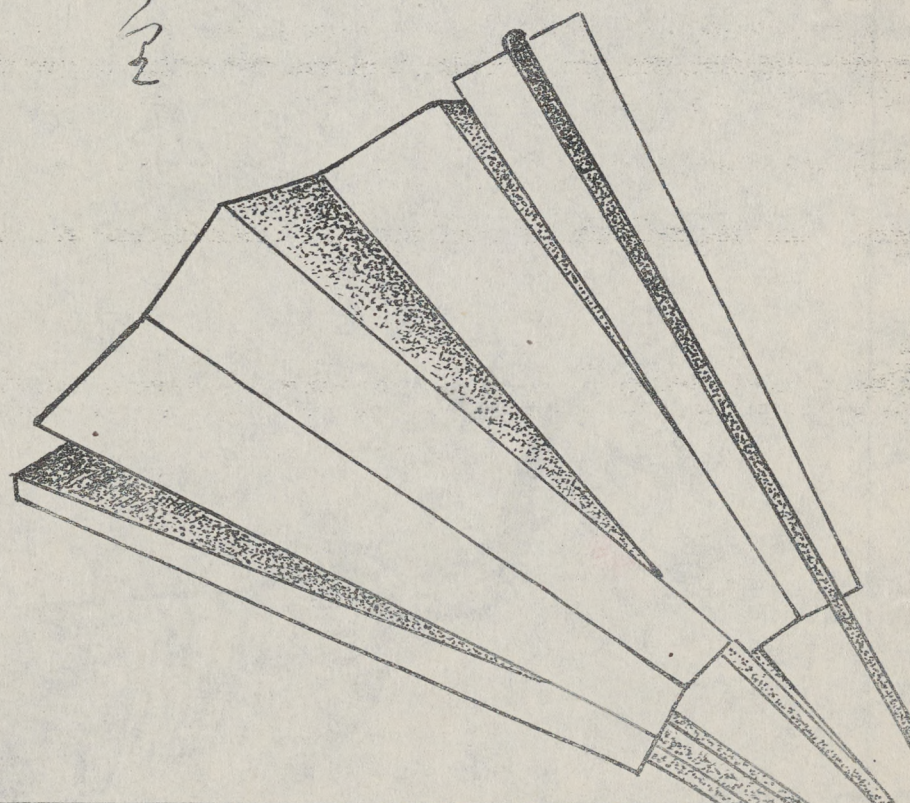
九  
月  
錦







お・扇子と  
ちとおえと  
あめなと



外川  
望



二世の悲戀	芳川積三	和氣湖月選	永瀬勇選	青木伸	片井溪巖子	森山勝子	外川明	宮本武蔵	才子	雨情凡通	夢昏の情景
物外和尚	土屋天眠	島原潮風選	和氣湖月選	永瀬勇選	青木伸	森山勝子	外川明	宮本武蔵	才子	雨情凡通	夢昏の情景
戦	長谷川生	島原潮風選	和氣湖月選	永瀬勇選	青木伸	森山勝子	外川明	宮本武蔵	才子	雨情凡通	夢昏の情景
権原景季	長谷川生	島原潮風選	和氣湖月選	永瀬勇選	青木伸	森山勝子	外川明	宮本武蔵	才子	雨情凡通	夢昏の情景
争	長谷川生	島原潮風選	和氣湖月選	永瀬勇選	青木伸	森山勝子	外川明	宮本武蔵	才子	雨情凡通	夢昏の情景
綿輯後記	長谷川生	島原潮風選	和氣湖月選	永瀬勇選	青木伸	森山勝子	外川明	宮本武蔵	才子	雨情凡通	夢昏の情景



## 巻頭言

清濁併せ吞み、然もそれに影響されて進路を誤るといふやうな事がなく、目的の彼岸に向つて突進する怒濤のやうな偉大な人間となりたい。

他人の缺點や誤りを姐上に乗せて、それを非難し嘲罵したとて何の得る處がありう。結局それは自己の卑劣な心情を告白したにすぎず、第三者かう蔑まれるに終るのである。

「俺があつた。俺だから……彼女には出来ない」といふ自己宣傳は他に認められてゐない証據である。俺が、といふ自己を捨てたいものである。總理大臣に参百斤の重荷は擔げない。だからと言つてそれを易々と擔げろ若者より偉いのだ。處でその劇しい筋肉勞働に堪え得る勞働者がなくて社會は營めない。人各々に天與の職域がある。それを全うして始めて人間社會が健全な發達を遂げられるのである。

同じ民族の血を享けた兄弟姉妹が協同生活を營む。ホストン、假令我等の今日の生活は暗くとも、臆て来るべき將來は大きな歡みの日である事を確信して、他の過ちを徒らに咎めることなく、互に慈しみ補ひ扶け合つて平和な生活をつづけ、有終の美を成したいものである。

高邁な志操を育み、惱める人々に慰藉を與へ、失意の底に悲觀する人或は懦吏をして奮起たしむるやうな大文學、優れた藝術の出現を要望して止まない。

(N. M.)





す  
き  
お



# 詩黃昏情景

青木伸

新月に尾を立てる黒猫

蝙蝠の聲はうにばれ落ちる夕空の翠滴

早熟なる娘達は紅い唇をそろへて

今日もボーイ達をキヤンプ外れまで見送ってゆく

兵隊にゆくA シカゴへゆくB

季節替傷のC D E F G H

送別會毎に唄ったり踊ったりしては

かうして次から次へと送り出す

さびしくなるけれど

戦争が済むまではしかたがないわ

やがてバラツクの門々から

蚊遣りの煙がくすぶり初めて

涼み臺の上からもやはり

しかたのない話がひろがって行く。

(去年の詩のノートより)





學

書



訓

芳竹庵

自分には書道を論ずる資格も。學書を古々する程の素養もないが、斯道の大家が我々に訓へられた書道の要訣を少々抄出して参考としたい。

人の生れつきは種々様々で、顔の同じ人は一人もなく、心の同じ人も一人だつてない。恰も指紋の如しである。

そこでその異つた人の書く文字である以上、それ／＼特徴のあるのが當然である。その特徴を大別すれば、巧と拙の二つになる。しかし専門家の目から見ると、巧も可、拙も可。

古來善書として優れたものは寧ろ拙の方から生れたのが多い。雄大、豪放、磊落、痛快、といったやうな書がそれである。巧から生れたものは、優雅、婉麗、瀟灑、輕快、と云つたやうな書である。之によつて見ると生れつき拙な人は却つて天分が豊であると云ひ得る。而もこの拙な



人に意志の強い人が多く、『下手だから習ふのだ。』『下手だから人一倍の努力をしなければならぬ。』とおふ考へで努力するから進歩も目覺しく、又大成もする。

書を習ふ目的は立派な字を書くことが第一でなければならぬ。

『何事でも踏み出しが大切である。書道を學ぶに當つても第一に注意しなければならぬことは、善い手本を見、立派な書を鑑賞することが大切である。』これは要中の要で貫名菰翁が三筆以来の大家と稱せられ、日下部鳴鶴翁が、我書道界の迷夢を破り、東海の書聖と謳はれたのも、この著眼の凡ならざるためである。

然らばよい手本とは如何なるもの？。

正しきもの、真面目なもの、見るから品格の高いもの、筆力が道勁で結体の整つたもの、これらはよい手本である。

奇なるもの、こけおどしもの、習氣のあるもの、幼稚なもの、これらはよい手本ではない。

即ち、良い手本を選び、良い書を見て、胡麻かしのない、立派な、氣



持のよい字を書くことを以て眼目としなければならぬ。

書も心も正しかれ、書を學ぶには、その目的を明かにし、それに對して確固たる信念の下に進むべきである。

ヘンテコな字を書いて得意がり、畸形な書を藝術書位に考へる者には王羲之の書も、鳴鶴翁の書も藝術書でなくなるわけである。

鳴鶴翁のえらかつた事は、あれだけ大家になつても決して勝手な字を書かず、一片一紙と雖、後進の範となるべき正しい字を書かれた。

翁も五十代頃には實に險絶な字を書かれた。時には奇に趨つた様な作もないではなかつた。ところが他の怪奇な字を書いて世人に喝采を博してゐる人達が出て來たのを見て非常に憂慮され、翁は何處までも正しい字を書いて後進を誤らぬやう心懸けられたのである。

自分の書がよく見えては大變。自分の書がよく見えろのは寡聞寡見の致すところである。自分の書をうまいと思つたら、どんな書を見ても之を取り入れる余裕がなくなる。鼻が高くなると手が下ろ。鳴鶴翁は、



『雪隠の棟上げをするな』

と訓へて居られるが實に名訓である。書を學ぶ者の銘記すべきことである。而して學書は、決して急いではないけない。しかし急けてはならぬ。

○

書を學ぶ人は、たゞ手腕を鍛へるだけで能事終れりとしてはいけない。その人格を磨いて始めて敬愛すべき書も出来、風雅の書も出来るのである。文字は如何に巧に書いてもその人物に兎角の非難があるやうでは、その書を床の間に掲げて鑑賞する氣にはなれない。

『書は心畫なり』と古人の云つてゐるやうに、その人の性情は自然に、その書にあらはれるのであるから、手腕を鍛へると同時に精神を磨く工夫を忘れてはならぬ。

斯くて書き上げた一幅の書は、自ら其性情が織り込まれて見る人をして一種崇高の感を抱かしめるであらう。

しかし、人格者ならば書道を學ばずとも立派な文字が書けるかと云ふに、決してさうではない。如何に人格は高潔でも、書道を學ばないで立派な文字の書ける筈はない。



書道は幽遠の藝術であり、五千年の歴史を有する至妙の技であるが如何なる天才も一朝一夕に之を能くすることは出来ぬ。しかしこれを修養の一方法として毎日筆を執ることを怠れば遂に妙境に遊び得るであらう。

こん風に大家は訓へてゐる。

(終)(一九四四年七月)

(第十二頁より續く)

『硅化物』 SILICIFICATION. 又『黄鉄』 PYRITE. に依るものを『酸化鉄』

PYRITIZATION. 又『炭素』 CONCENTRATION OF CARBON. に依つて変化されたものを『炭化』 CARBONIZATION. と名附けらるるのであります。

又普通化石のある地層は、一定の地質學的、境界を現はすものでありまして地質學上、考古學上、動植物の古生學上、又進化の道程を明白にする爲め、最も有力、且つ價值ある、併も動かすべからざる證據となるものであります。(以下次第)

○君子は、閒なる時、喫緊の心思有ることを要し、忙はしき處、悠閒的趣味あることを要す。(菜根譚)





## 化石に關して

新聞惣太郎

友人松原君が、矢形漢山氏の後を継いで文藝社同人の主幹となられしに就て、如何なる風の吹き廻しか、扱ても文士連とは甚だ縁の遠い化石のやうな変人にて、何か寄稿せよ、との仰せに自分ながらビツクリする次第であります。併し書かぬ事も亦、余りに卑怯にも見える、失禮にも當ちと思ひまして、自分の趣味の内から、少しばかり書いて見る事にいたしました。趣味と申ししましても無稽者の私、勿論、和歌や川柳は愚かな事、都々逸一つ知らないものですが、只一つ松旭齋天勝にも敗れない自信のある、エヘン……化石の中から、御望みのもの何でも出して御目にかける事にいたしませう。

## 化石は歴史の抽寫



今日地球上の諸方面に於きまする地層の中に、好く保存されて残つて居る澤山の動物や植物の保存物は、最も大切な地球其物と其中に曾て生活せし動植物の研究になくてならぬ。必要なる抽寫の歴史であります。一體、此化石と云ふ言葉は、ラテン語の Fossilis、即ち「地から掘出したる物」といふ意味でありまして、岩の中には原形又は其素質が、其儘ある條件の下に、長い年月の間、保存された動物や植物の形態と其痕跡とが即ち化石であります。

左様な理由でありますから、此の化石を蒐集して、研究するといふ事は、第一地學上必要である斗りでなく、動物學や植物學の上からも、亦ダーウインの進化論の正邪を正す、最も好き大なる研究資料でなくてはならぬと思ひます。そこで私は何故、この

## ポストーンに来て化石の蒐集

ロツ (3) 11

を初めたかと申しますと、自合の考へではポストーン位、化石蒐集に適した場所は、先づ世界の何處にも余りなからうと存じます。御承知の通り當ポストーンは、大河コロラドの下流に位して、何萬年、或は何億年上



流六ヶ州即ち、コロラド、ユタ、ワイオミング、ネバダ、カルホルニヤ、アリゾナのあらゆる谷や平原。沙漠からも亦山からも、無數の岩石や、數知れぬ種類<sup>の</sup>化石を、無限に下流に押流して今日に及び、其滞積層は幾千呎、實に驚くべき數量に昇つて居るうであります。私共の石にも左にも、亦前にも後にも珍らしい化石や美しい寶石がゴロゴロして居るのであります。併もポストンは其最も好い位置に建設されました新市街であります。化石愛好者に取つては此上もない幸福な處であります。

又外の方面から申しますれば、私共は今此ポストンに云ふ小さな場所<sup>に</sup>區切られて住んで居りますけれども、實は前記六ヶ州の山々、谷々を自ら跋涉して蒐集せしものと同じ丈けの奇石や珍石を手に入れる事が出来る<sup>と云ふ</sup>好條件にあるのであります。

又、宿命的に申せば、天は世の元始<sup>はじり</sup>から、經綸の中に、六州の石や化石を此ポストンに蒐集して、吾等大和民族の來つて蒐集研究する便宜<sup>べんぎ</sup>を與ふる爲めに待つて居つたとも云ふ得るのであります。かく云ふ風に考へて見ますと、私共として化石や珍石を蒐集せぬと云ふ事は、何だか大損失のやうな氣がいたしましたして今日迄、一生懸命に拾ひ集めて<sup>おこ</sup>次第であ



ります。夫れに御同様生活の保証はあらずし。時間も澤山ある事でありま  
すから……………。

## 當地に於て蒐集せし化石



の中で一番數の上から多いものは矢張、樹木の化石でありますが、之  
等は重に『針葉樹』に屬して居ります。中には『櫟葉樹』もあり又『棕  
櫚の樹』もあります。其他木の葉の化石や草葉、藻類の化石も相當あり  
ます。動物では最早現代に其存在を失つた、『三葉虫』 TRILOBITES、大  
蜘蛛の骨 DINOSAUR、貝類や珊瑚、又は魚や鯨骨等もあります。  
夫れから此東の山の下には『海百合』の化石、CRINOID、等は殆んど無  
限にあります。如何にせん。當ホストンは地質學上、世界に又とない有  
名なグラント・キヤニオンの直ぐ下流に位する土地で、思ひも  
寄らぬ珍石や化石のある處であります。

## 化石は如何にして出來たか？

と申しますと、普通動物や植物の死後、直に其組織を爲す有機物又織



種に腐敗せしむる「バクテリア」が侵入し、支れに續いて、硅素やカルシウム<sup>の</sup>の如き礦物性のものが徐々に充實されて出来たものであります。其他或種の針葉樹の脂に、種々の虫類が捕へられ、又其上に流れ出る脂に依つて蝕はれ遂に虫諸共、化石となつて今日残つて居るものもあります。支れは「琥珀」AMBER、でありまして、其中にあら虫類は今も尚、太古の面影や色彩迄も其儘残つて居るものでありますが、大体に於て化石は普通、

第一有機物が其を保存する媒介物に依つて、速かに埋没せらるゝ事、

第二、此條件に依り、比較的其固い部分、即ち骨とか、貝とかは、顕微鏡を通じて見ても、其組織が少しも変更されずに、只有機物のみが無機物に、化學的變化を來たした文けで、保存されたものであります。

## 化學的變化の意義

そして其化學的變化とは、炭素カルシウム、CALCIUM-CARBONATE、に依つて、原體に変更を來されたものは、「炭化」CALCIFICATION、と云ふ「硅酸」SILICA、に依つて、変更されしものは、(以下第七頁へ續く)



## フロイトとその思想

谷川江浦草

第一次世界大戦も終つた頃のことである。

ブダペストはハンガリー大學の禮拜堂に於て國際精神分析大會が開催されたことがあつた。今しもこの會場に入つて来た一人の學者がエツタリと椅子に腰を下したかと思ふと、おもむろにシガーを取出して火をつけやふとした。神聖なる禮拜堂であつてみれば禁煙は去ふまでもないことである。これを見て同輩たる役員であつたが、急いで其學者の許にかけつけると小聲で耳うちをした。『あう、此處は禁煙なんでございますか……』。『あうさうですか、でもこれかうはいゝと云ふことに仕様ぢやありませんか』と云ひ乍ら靜かにシガーに火をうつした。この巧まない如何にも自然な彼の言葉に既に着席してゐた一同は暗示でもかけられたやうにめい／＼煙草を取出して濛々たる紫煙の中に討論に移つて行つた。一見如何にも不逞なこの學者こそ會長として出席した精神分析學の父。



フロイトの在りし日の姿であつた。

フロイトが古命地ロンドンの寓居で八十年の生涯を終つたのは丁度今から五年前のこの九月であつた。彼は生涯の殆どを奥太利の旧都ヴィンに暮し死の前年猶太人なるが故にナチ政権に追はれて英國に渡りそこで彼は淋しい人生の幕を閉じたのであつた。彼の學説には多々承服出来ない点があるにしても人類が今日の如く無意味な拘束や禁制の中に徒らに末梢神経を痠らせつゝあるを見る時に私は今更の如く彼の偉大なる獨創的體系に心うたれるのである。禮拜堂に於ける彼の行動にしても甚だ不逞なることの様に思へるが喫煙が別に不真面目を意味する譯でもないと分析的に考へられてゐる以上、斯ふした無意味な拘束を人間生活の中から一つづつでも除去することは人類の神經醫を以て自ら任じた彼には余りにも當然なことであつた。

彼は何故この様に特異な學的體系を打ち樹てるに至つたか？。そこには彼が少数民族の常として歩んだ茨の途があつたのである。自分はユダヤ人である。民族的に劣等なものであると云ふ感情をどうかして處置したいと願ふ彼の苦悶は豫想以上であつたらしい。彼は自敘傳の中に次の



様になつて居る。『私は大學に入つて始めて自分はユダヤ人なるが故に自分を劣等と考へ他人種からは仲間に入れてもらへぬ運命にあるものだ』と考へる様になつた。然し暫くたつと私は何故自分の血統の故に自分を恥ぢねばならぬのか。人間は努力次第によつては仲間外れにしたがる彼等多数者の一角に切込むことが出来るのではないか。と考へる様になつた。私が後年多少とも人と違つた考へ方をするやうになつたのもこの、結束してゐる大多数者の考へが集團の外に立つて見れば如何に馬鹿げたことに見へるかに思ひ至つたからである。』と。ユダヤ人の中から一々の碩學や獨創的天才が輩出するのは皆この心理的苦悶の結果であらうしいが、『結束してゐる大多数者』と云ふものは大抵みな同じ様なもの、見方をする様になるもので大學の研究室や余り幸福な集團の中からは獨創的な思想が出ないものである。何故かと云へば彼等は飛び離れた思想を抱くことに本能的な不安を感じ知らず識らずの中に自分の獨創性を束縛するからである。そこでフロイトは大多数者が後世大事にしてゐる禁制でもそれが埒外より見るとき馬鹿げてゐると思へばドシ／＼分析の俎上にあげ、少しでも人間への負擔を軽く仕様と試みた。



彼は人間の本能は性慾であると観じた。産れたばかりの乳児でさへ母の乳房をまさぐることに満足を感じ、又大小便の排泄を後らすことに依つて排泄時の快感を得んとするがこれらは凡て本能なる性慾の現はれだとしてゐる。しかしが發達するにつれ人間の性本能は社會道德や良心の監視を益々嚴重に受ける様になる爲その本能は如くされ充分なる満足を得ることが出来なくなつて来る。そこでそのハケ口は形を変へて夢に。文學に、宗教に。哲學に現實逃避を行ふ。これらに依つて尚満足し得ない程現實の壓迫が強い時は人間は神経衰弱症を示す。従つて文明の進歩は精神病患者を増加せしむる傾向ありと論断して居る。思春期前後の高い所から墜落する夢、深い谷間へ落ちる夢は強烈なる性慾の現はれであると同時に充分なる性本能の満足を得ることが出来ない程現實の壓迫強き爲母の胎内へ現實逃避を行つた、あることを示すものでありとフロイトは説いてゐる。

彼は單に奇を衒ふ抽象論理の空車を廻す空想家ではない。後年は殆ど文明批評家として立つたが、もと／＼病理學者であり、アルカイド・コカインが局部麻酔として有効であることを發見した程の實際家であるからその言に聽くところ又多いとはおはねばならない。

(終)



ジ・タボレ

# 戦後はどうするか

ロイ・タザワ

『戦争が何時済むか』 今日これ程廣く一般に関心を持たれる問題はあるまい。戦争ニユースを觀る心にも又戦況の推移に對する考察にも、『早く戦争が済んでくれ、ばよいのに』と云ふ氣持が心の底にうごめいてゐる事は否めない。かういふ一般的の動きに迎合せんが爲ばかりではあるまいが、米國政府にしろ、英合國側の諸國にしろ戦争酣の今日旺に戦後問題が議せられたり計畫されて居る。明日の日にも休戦ラッパが鳴り響けば私達は戦時体制から開放せられて常態に復せねばならず。又それを心から待ちわびて居るのではあるまいか。既に二軍有餘の轉任所の蟄居生活にあきくした氣持は兎もすれば外部の狀況が氣にかゝるし。又外部へ再轉任の呼聲に由り動かされる。それなのに、戦後私共はどうするかの問題が轉任所内で更に検討されないのは一体どうしたわけか。勿論 W.R.A. は再轉任に大量となつて働まかけて居るが、私達エバキウイとして、はそれをその儘鵜呑みに出来ない事情や關係も種々あらうし、又私達自体の希望や意見も相當あらうから、一般によく『戦後どうすべきか』の問題を検討して



具體案を作る必要はなからうか。例へば今日までのW・R・Aの轉住方針を省みると都市中心の工場送りだとか農園働きにしても彼處に一人此處に二人のバラ撒きで、農園出の多い日系人が経済的に立てるかどうかが危ぶまれるし折角の再轉住も完遂出来ずとも思はれず、今後幾多の問題を取り残される様に見へる。

留項ハート・マウンテンの指原藤三郎氏（譯者岩城ドラツグ）が各轉住所の協同組合を中心として製造會社の創立案を出されたが、これも一案として真に結構で早く具體化したならば……と考へるが、もつと一般エバキエウイーに向くやうな名案が出ないものかと待望される。平和への解決がどういふ風になるかといふ事は豫断どころか皆目見當もつかない事だが、この戦争によつて各國共極度に疲弊して、再起回復が一通りではない事は今からでも想像出来るから、果して戦前の經濟機構をその儘に持續出来得るかどうかは富裕世界一を誇つたアメリカですら疑はれる。又この戦争を契機として革命、それに近い大きな変化が来るのではあるまいかと不安も眼にちらつく。殊に戦前アメリカは生活標準が群を抜いて高く、豪華な生活をしつづけて来た丈に、来るべき時代に認識を新にし、生活を更新しなければ、にっちもさっちも行けないデレンマに陥る危険はなからうか。あれやこれやを思ひつづつても尚私達は眞剣に戦後問題の對策を熟考しなければならぬやうだし、又その必要が追い迫つて居るものゝやうである。

(終)





## 斷想とところどころ

眞澄 丘

人類史以来今日に至るまで大きな謎であり、公開された秘密は人間である。吾人間の心であらう。『おい君、君のネクタイが曲つてゐるよ。』と注意されたら即座に『サンギエー。』とよろこびを以てその注意を受けけるにちがひない。『ネククレースがわがんでゐますよ。』と人からきこしたる處女の羞恥心は幾分顔に出て、心にくいとはどんな娘さんだつて思はぬであらう。その反面如何に着物や装飾は出来上つてゐてもどこかに露れずにはゐない各自の心の歪曲。己の不徳を誰か心から思つて呉れる友人からでも『おい君の心は近頃随分曲つてゐるよ。』等と言はれた時にはお互どんな心持でその忠告を享けるであらうか。誰かの言葉に『顔は言行と共にその人の人格を忌憚なく描き出す掲示板なり。』といふのがある。實際吾々の顔に日々如何んな揭示を書き出してゐるか、問題なのである。『氣前の好いがールだ。』エ、五十仙のところ一帀チツプを切つてや



れ!! 虚榮心が手傳つたよろこびかも知れないが、出して與へたあとの心は誰でもうれしい。この人ならきつと一勝但はチツプを呉れるだらうと思つてゐる所へ五十仙もらつたら、五十仙の收入があり乍ら内心ブツブツ言ふ。一 人間は得して泣くのか損してよろこぶのか一寸解しかねる。『壁一重子があつて泣き、無くて泣き』言ふ川柳が物語る様に子供のない者はその孤獨に泣き、その反面子供があつても『兄は美酒、弟は暗傳、姉は小盗、妹は淫賣、次の弟急げ者、その妹が親不孝、次の兄弟姉妹奴がそろひもそろゝて放蕩饒舌喧嘩好き、親類縁者に見放はなされ、どうやらかうやら末の子が何處へものかず静か好きヤレ』これと思ふたに、其甲斐もなく青飄輩、年から年中藥びん、ヤレ子があつて泣くわいな、わたしや子供はいりませぬ。』と言ふ俗謡は正しくあつて泣く世の親の愚痴をかこつたものであらう。何處までも不可思議なのは人間の心である。この矛盾だらけの心の中に一つの統一的肯定を要求してゐるのが宗教である。人生を正視する事は自己を凝視することであることに出發して、最後に止揚された自己(大我)に投入する所に宗教の共通目的があるとするれば、矛盾の中に生きる自己を統制し、人間生活に價値の世界を



見出さんとする人生である限りに於て、宗教は依然現實の人間生活にその生命力を有してゐるのである。

×

×

×

人は何か世の中の人のよろこぶことがやつて見たいといふ心を有つてゐる。所が精神的に誰か自己以外のものから『己は利用されてゐる』と氣がつくと一舉に己が自尊心をきづつけられた様な、そして他人に己を玩弄されてゐる様な心に銷されて無性にブン／＼したくなる。この一点が大切な人生のポイントである。この瞬間をグツと把握するか棄ててしまふかによつて心の世界は明暗二途を選ぶのである。實は人間は世の中の人に利用される間が花なのである。キリストも『吾が來れるは人に使はれんが爲なり』と言ひ、蓮如上人も『如來の御代用として』。傷かしめられてゐることをこよ／＼よくこんでゐる。世の中に生きてゐる人間が同じ人間から利用もされぬ様になつたら療物であり、やがて塵溜に捨てられて省みられない人間であらう。利用されつゝも自己を省みて今日一日の生活に進歩と向上と歡喜の心を見出す事につとめることが出来たらこんな結構な事はない筈である。



道を歩いてゐる時何かの拍子に石につまづく。「エ、畜生!!」とその石を蹴りまわす人はやがて次の石につまづく人である。踏いたその瞬間、自分の足のどの方か不注意があつた事に氣づく人のみが二度と同じ思ふくりにかへさぬ賢い歩み方である。要するに道の中はGO AND STOP。歩み方をすればSTOP AND GOの歩き方を人生の軌道にすればである。前者が常識生活であるとするれば後者は宗教生活である。ゆきて、つきあたるこの生活はまあ何とかならうだらうと言ふ漠然とした人生目的で止つた時を自己の運命と心得、災厄と思つて善處する生活である。後者即ちSTOP AND GOとは現在の一瞬を凝視し何の爲の「止れ」か止らねばならぬ自分はどちらをむいてゐるのかを反省し、自己に一切の基因を求めて進んでゆくゆき方である。つまづく石も多少の縁で「こゝん畜生!!」ではない。自分を知らせてくれたこの石にたとひ無心の石と雖も、合掌して行くこの態度こそ宗教者即ち宗教生活者の心がまえでありたいと思ふ。(終)

● 不念を以て念に勝て、善を以て不善に勝て。施を以て慳に勝て、實語を以て妄語者に勝て。(法句經)



## 改善すべきもの

有田 百

△先づよより範を垂るべし！

公立學校教師に對し、ピンの贈呈式を舉行するから是非ともブラツク代表の意味で出席されたい。と學務委員の申渡しがあつたので、發表された開會時間七時を十分前に、式場である學校の講堂に赴いたが、意外にも少數の人々で、未だ場内で何事が準備をしてゐた。寧ろがラン堂だと言ふが適切であらう。筆者は端然と椅子に凭つて晴れの贈呈式の壯觀を想像したり、アドベの建築美に心を惹かれながら、只管開會の時刻を待つてゐた。

時の流れのもどかしさに時計を見ると、早や針は七時半を指してゐる。丁度其頃からポツリと参列の紳士淑女の姿が見へた。更に二十分を經過しても一向に開會の様樣がないので餘りのことに筆者は責任者に問ふた。

何時に開會されるのですか。案内には七時開會とありましたが……  
「實は七時開會は時間の間違で、日本人には七時半の開會で、白人には八時と通知してあります。」との解釋であつた。



備て誤ちば誰人にもあることであらう、七時半が七時と發表されてゐても決して咎むべきではない。只筆者は何故に莊嚴なるべきピンの贈呈式の開會時間か、日本人に限り七時半にして白人に限り八時であるのか、この三十分の開きは實に重大なる結果を民族の將來にもたらしはしないであらうか。我等の兒童に及ぼす波瀾の意外に深刻なるべきかと思ふ時決して輕々しく片付くべきでなからう。ブラツクの學務委員に聞いて見よ。何時の集會でも三十分や四十分、時には一時間も後れて始まるので、とても迷惑して居ます。と嘆息を洩して居た。

苟しくも範を垂るべき學校關係の識者が、前述の如き不為体<sup>ふしだら</sup>の行跡に對しては決して辯解の余地はなからう。父兄の出席が後れるから、開會時間に掛値するものは得ない。などとは斷じて責任の轉嫁であらう。筆者は決して攻撃するのではない。只兒童教育上由々しき惡影響を及ぼすを憂ふるために父兄の反省を促すだけである。

### △獨立祭當日

公共課のISO主催の儀式に参列した筆者は痛く失望した。開會は一時半との嚴達であつたにも不拘二時二十分に及んで漸く開會された。冷空設備の不完全な場内である。炎暑に喘ぎ流るゝ油汗の苦惱もさることながら、我等の子弟に及ぼす惡感化の如何に大なるべきかを憂慮する苦惱が、ヨリ大であつた。それは多數のボーイ・スカウトやガール・スカウトが参列してゐ



た會合であるからである。

接するに、斯る極端なる時間の遷延は、自然不爲体の民族だとして輕侮を招きはしないだらうか。今日既に『ジヤパン・タイム』だと二世は輕蔑の笑を浴せて居る。而して彼等自身が此惡弊に感染されてはゐないだらうか。我民族は日常生活に於ても實にきびくした民族であることを實踐すべきである。こんなキヤンプ生活だから、とか、十六那の月給だから、とか、政府のものだから、とか云ふ弛んだ心掛けでは民族の向上はむづかしい。若しも我等の子弟が、我民族の誇りに疑ひを持つたならば、懷疑の反影が少しでも兆すやうなことがあつたとしたならば、實に大変なことであらう。堤防も蟻の穴より決潰する。兒童教育上是非其是正して戴かねばならぬ事柄である。時間を守りませう。

### △一旦民族の誇り

に疑ひを抱き又は其誇りを失つたならば其民族は徐々に墮落し、退歩するものである。個人にしても自己内省に失望し、將來に懷疑するに到らば、自然自暴自棄となり、反省と祭憤の力がなくなり遂に遊墮に陥り、享樂を逐ふて、あたらし生を無爲に終るであらう。

黑人の偉人と唱へられた、クーパー・ワシントンが黑人種の敗退、墮落、更に人種的に向上の萌しきへ見へぬのに慨嘆して其原因を探究した結果は『黑人の教育程度が低いからである』と断定した。故に有志と共に黑人教育のために、デキヤスに大學校を創設して盛んに高等教育を黑人に授けたのであつた。



然るに如何程黒人に教育を施しても、民族的に覺醒し、社會的にも更に向上の徴候さへ見出し得ないのに不審を懷いた。此大なる事實問題に直面したクーパーは、有ゆる角度から其據つて来た根本原因を検討した結果は實に左の教語につきてゐる。

「黒人種は傳統的に世界に誇るべき文化を持たぬ國」

之である。換言すれば黒人種には何等世界文化に貢献した何物もなく、民族的に其背景が寧ろ恥辱史であるために、精神のドン底から沸き上る烈々たる自發心！祖先に對する眞摯なる感謝と愛着心！抑へても壓へ切れぬ榮憤と云ふやうな條件に飲けてゐるためであることが、明瞭になつて長太息したのであつた。

雄大にして豪華な、背景なき民族は遂に墮落する。奴隸根性に墮し竟に滅亡するであらう。

我等が常に民族の誇りを、ハツキリと我等の子弟に自覺せしめ、其誇りを益々高揚することが米國文化に貢献する唯一最大なるものと説く所以は實に之がためである。吾人は細心なる注意を以て兒童に接し、各自が範を垂れて二世を善導いたしませう。

(終)

釋故のまだ許されぬ雪を賞で。



塩出元の實感句にして血の滲み出る様な特選句として光つてゐます。

御兄の人格の餘香がか珠玉の一文に強く胸打たれて……吾等の川柳も嘗つての狂句百年の弊を除去して時の流れに棹し更に靈的方向を織り込んで香り佳き民族養成の一助となるべく念願して止まないものです。

眼に見へぬものを掴んで聖く生き

『ヘブル書第十一章第一節』

足ることを知る一日の軌を脱ぎ

『マタイ傳第六章第三十一節』

鐵柵の中にも神の避けどころ

右はワールレーキの瀧川巴水氏よりの私信の一節です。拙文に對する讃辭は恐縮ですが、巴水氏の意圖仰し計られて嬉しき極みです。

多謝 御自愛を乞ふ。

有田 百

諸共に佳き實獲らむと汗をかき。

『ルカ傳第六章第四十三節』

(終)

。朝顔の色は様々ありつれど、人目に着くは赤と紫。

杉貞次郎翁

。作物を植えて日曜休みなし。

。炎天も日傘のお蔭しのがる。



# ポストン 生活印象

(一)

貴家あま子

入所第一日

千九百四十二年五月二十九日、この日私たちのグループは、第二の故郷ともいはるべき羅府を立退き、渺茫たる沙漠を一日乗りつづけた夕刻、小さなパーカー驛に着いた。ここで先きの列車の中の同胞を順々に、ポストンへ運んで行くそのバスが、また戻つて来るのを車中に待つこと久しく、炎暑に加ふるに前日よりの住居引拂ひの疲れで、皆々ゆで上ったやうな顔をしてゐた。

バスの中に入つた頃は、夕日は既に没し黄昏に近い沙漠を、再び走り出した。間もなく、ふりかへり見た時は、パーカーは天空の中に消え去つたやうに見えるなくなつてしまつた。やがてバスの方角が少し變つたと思つた時、遙か地平線上二尺ばかり離れて、ポツポリ月が出てゐた。私はお伽噺の世界にでも生きてゐるやうな、夢心地になりだした。

たゞたゞ沙漠と空だけのこの天地に、もう一つ月がふえてきたのだ。曾ては見たことのなかつた、現在のこの光景に心をとらはれてゐたのも束の間で自分等の真向なは、濃霧が掩つたやうで、先の方は判然しない。その内に車中の人々はおほこりに咽んできた。濃霧の如く見えたのは砂煙であるとあかつ



たのである。

敵國人として奥地に追はれつゝある悲しみよりも、今宵より我等の住家となるべきその家、その光景はどのやうであらう。大かたの想像はついてゐても早く見たい心のほうにがさきにたつてゐた。

一心に見詰めてゐる窓の夕闇に黒く並んだ屋根が朧に見え出した。バスは静々その中へ入つていつた。

新入の同胞を迎ふべく、或は見ろべく、戸外に集り勤めく人の山は、砂塵の中に朦々と、電燈の光りにぼやけて現はれた。

こゝに停車すること、暫しで一人の青年が入つて来た。

「皆さんぞお疲れでありましたでせう、私たちはこれから、この場所ですべて協力し合つて生活して行きます。特にローサンゼルスからお越しの方々は誠にお氣の毒で同情に堪へません。戦争のために大いなるシロツクを享けましたる身心を、又この沙漠の地に運んでまいりました。我々は前途の苦難に打ち克つ勇氣を益々鼓舞することに全力を注ぎませう。それで私もはこのキヤンプに於て、自治制のもとに總てを運行して、まゐることになつてをりますので豫めお傳へしておきます。今皆さんがバスから降りて、踏み出す第一歩からこの生活が創められ、印象づけられるのであります。下は前のかたから順に降りて下さい。手荷物はある電燈の柱のまはりの地面に置いて、あそここの室にお入



りを願ひます。

指令された室内では、先着の青年男女が大ぜい事務をとつてゐた。各自持参の寫眞入り身分証明書を示して、又こゝでも指紋を押し、右手を舉げてアメリカに忠誠であることを誓ひ、こゝを出て他の室へ入った。こゝではめい／＼の住むべき室を取り分けて貰ふのである。立ちたるまゝ待つこと十一時頃に及び、漸く未知の家族と組み合つて、一室に二家族に入ることに定つた。一室には八人以下を割當てとする規則に従ひ、私の家族は人員不足といふことであつた。

室を出て深い砂地の中をう／＼と、待つこと久しくキヤンバスで掩ふた。アーミー用のツラツクに乗せられて、興へられたる住家に向ひつゝ走る凸凹の道に、時々顛覆の恐れさへ憂ふる如き動揺に、眩暈のゝで、こゝからまだ自分等の室の遠いのに、つぶやきつゝ揺られてゐた。

漸くツラツクがとまつた時、先づこのツラツクから、降りることが嬉しかつたのである。

吾が家と稱ふる室内の入口に立つて、格別の驚きも出なかつたけれど、床板の上に我が二寸程積つてゐたのには啞然とした。掛ける腰かけもなく、スクリーンのない窓ぎはの壁に身体を支へて立つた。

罪なくて 儼らしめらるゝ もの怖ぢに

似たる おもひに 立てる 部屋のかな。 (入所の日)



暫くして青年が入つて来て、こゝは自治制であるといふことを告げて去つた。前にバスの中で挨拶をした青年の、自治制といふ言葉にだけ私の耳がそばだつて、意外の感じがしたことを再び思ひ出した。恐らくこれは自分だけではあるまいと思ふ。軍令によつて収容地に入れられた上は、何事も軍部の裁可を経たる管轄下に、おかれるものと考へてゐた。

程経て青年が白布の袋をくれた。これにへいを詰めてマドレスにするやう。へいのありかを教へて去つた。暫くして陸軍用の寝名が運ばれ漸くそれに腰をおろし。またすこしたつと第一本とバケツ一ツが興へられ、七人の寝名が並んだけれど持参の蒲團は、あすでないで手に入らないと知れた。遂に立退き前夜と同じくゴロ寝である。


電燈は消えても室はまだ明るい。両側の壁にたくさんある節欠から、あかりが洩れ、向ひ屋の電燈までが、様々の下を日がさしたやうにして、並んだ床板の隙間から部屋を照らしてゐた。

晝夜兼行の地ならし。ミシンの騒音は凄まじい響きと、夜の明くるまで鳴らしつづけてゐた。(以下次節)


● 動く葉もなくておそろし夏木立 (蕉村)

● あつた雲は稲妻を待たより哉 (芭蕉)





# 造花の思ひ出



大岡きみ

十数年前に只自分の趣味として習ったや、やかな手藝が、今頃こんなところで芽を吹き出さうとは思ひがけないことでした。

二三年前の夏、造花のクラスを始めた時も、こんなにないつまでも續けられやうとは思つて居ませんでした。

入所當時の青草一本生えてない砂ほこりの中で病床になやむ方をおなぐさめしたい願ひから、サンプルも繪も型紙もない記憶の中からつくり出す花、材料もなくオレングヤレモンの包み紙を使つたり、葉をつくるためにトメトやビールのキヤンの貼リ紙からグリーンを切り抜いたりしたあの頃の花は、今から思へば色も形も随分変なものでした。

でも私にはあの當時の氣持ちがなつかしまれるのです。

誰の心にも人としてのがんとする誇る念みや、敗けまいとあせる心も見られませんでした。お葬式の花輪にしても、草花一つないこの沙漠に淋



しく逝かれし靈。遺族の方の悲しみをお慰めしたいまごころから、ク  
ーラーのない午後の暑さにゴミ風のたびに窓を開めて、背に胸に夕ラリ  
くと流れる汗を地圖のやうにドレスの上ににじませながら真剣につ  
くったあの頃は、他のブラツクのよりも立派につくらうなどと云ふ不純  
な気持ちには起り得ない程私たちの心は思いやりに充ちて居ました。  
造花といふものに美術としてう價值がどれ程あるされるものが私には  
わかりません。

私には只このいとも小さい御奉仕が、戦の嵐に吹きなやまされ、沙漠  
のやうに荒れすさんで行く今の世に、誰かの心の悦びとなり慰めの泉と  
なるならば幸ひだと思つて居ます。

『おかげさまで外部に居る子供たちをよろこばす事が出来ます。』

『お世話になつた白人の方にお送りしたうてもよろこばれました。』

『この年になつて思ひがけないよいものを教へて頂いて何よりの樂し  
みです。』  
『なごう、ワザ』  
『お禮の手紙まで持つて来て涙をうかべて』

よろこんで下さるお言葉を聞く毎に、私の心もうれしさに熱くなり、こ  
の次は何をつくつてよろこんで頂かうかとはづんで来るのです。



草一つ生へさうにも思へなかつた砂原にも、絶へ間なく水の注がれる  
 ところには、さま／＼の草がスク／＼と伸び上つてくろやうに、熱心に  
 水を／＼と求められるクラスの方たち、前にどうしてよいか解らなかつ  
 た私にも、十数年間忘れられて居た手藝の種が、多くの友のたすけとほ  
 げましにうるほされて、ポツリ／＼とよみがへつて来ては今日まで續  
 けさせて頂いたことを感謝して居ます。

でも荒野の中ではよろこびいつくしまれた名もなき草花も、到る處に  
 美しい花園がつくられるとともに、かへり見られなくなりました今のホ  
 ストンに、不徳な不行届きな野の花のやうな私がいつまでも先生顔をし  
 て居るのを恥かしく思つて居ます。

(終)

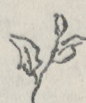
オチバ

本林山勝子

オチバヨ

オチバ ツメタカロ  
ワタシノ タモトニイレテヤロアサヒニ シモノ トケルマデ  
ワタシノ タモトニイレテヤロ





# 信念に生死す

▲偶感偶語

矢形溪山

▲戦場の兵士は已を犠牲にしてよりよき世界の建設を目標にすることによりてのみ凡ての苦しみと悩みを克服し得る。と言った様な事を何かで見た。

昨夕シカゴの夕刊を見ると、シカゴ出身の飛行士が正に長爆撃の途に就く時、両親と、弟とに認めた手紙と、両親と飛行士の寫真とが大きく載せてあるのに氣付いて讀んで見ると、先づ両親の恩を謝し己の到らざるを詫がて後己の生還を期せざる覺悟を認めし後に、『吾々猶太民族はかなり永い間苛酷な取扱ひを受けて居る。此戦の勝利の後には必ずや猶太民族のために、よりよき世界が顯出される事は明かである。此大きな救済のために、自分はいしむびても喜んでくれ。』とこま／＼認めてある。そして此の手紙は、爆撃決行後歐洲戦線から、同人の行衛不明の通知と同時に両親の手が届いたのであった。



信念に生きた美しい犠牲に似て感服した。

▲信念のために働き、信念のため 驚れる位崇高な尊さはない。基督も、日蓮も、親鸞も到る處までがあつた。けれども之に屈せず真向より

勇進したが故に、王者となつた。

西行も芭蕉も行脚で身を終つた。けれども信念があり、達観があり、

自己を開拓するに忠なりしが故にその生活 幸福であつた。

蕨村の作句は二百年の後始めて世に認められ、けれども彼には恐ら

く認められやうと言ふ野心は毛頭なかつてあらう。

信念のために犠牲になる事は、外觀に反對に、内 には愉快な建設に

違はない。今在米丁二万の同胞に此犠牲と、此信念ほど 力なものはない。

るまい。

▲私は羅府に居る時には、向ふからサイドウオーク一ぱいになる。来る数人の人があれば決して譲らずに、右の一角を切り抜けて自分の権利を保護した。が、ホストンからシカゴへ来る時に、其バイブルは一切放棄して道一ぱいに数人の人等がやって来れば、自分は草の上を通るなりストリートに下りるなりして道を人に譲る事を固く決心して之を守つて



居る。

まださうした経験は少いが、よしあつても、癪にさはらない。自ら謙讓の徳を守つたことを自ら誇りとし相手も感謝して通る様に思はれる。此の主義の下に、極力人と争を避け夜は外出せず、バーに入らず。よく人と協調の目的を達してゐる。

▲吾は森羅萬象中の一物に過ぎぬ。宇宙を離れて己はない。日の恵み土の恵み、人の愛によりて立つ吾が生活は、對立によりて敗れ協調によりて幸福を求め得、權利の主張を後廻しにして、義務の履行に極樂世界の建設あり。實れる種は時を待ちて必ず陽の恵に土を割る。

世界動乱の中に一人としてよりよき世界の平和を願はぬものはない。戦線に立たざる吾等は若かず銃を採らずして先づ己を犠牲にし隣人愛より始めて萬人の要求する世界平和建設の一助となさんには自己のために、民族のために、世界のために、再び牯牛の言葉を借りて、

『すべからく吾人は現代を超越せざるべからず。』

と云はん。

(終)

七月十八日

ミシガン湖邊の寓居にて、

●じり／＼と照りつけられて實る秋 (ニ宮翁夜話)



# 詩圓に悟る宮本武蔵

……吉川英治氏の小説宮本武蔵を讀みて……

外川明

む、何時しか秋か……

寺の山門の一枚の蓮の上に

武蔵も其年の秋を感じてゐた。

◇ ◇

何が故の行詰りぞ

劔の工まか。否

處生の方角か。否

不成就の戀の爲か。否

戀のみでこんなになんで

瘦せ細る俺ではないのだ

劔だ、劔だ！

道も悟りも一切劔とのみ

修業に修業を重ねては来たが

如何にしても解りない

この大きな凝結。

◇ ◇

この行き詰りの打開を待むのは

この愚堂禪師とのみ想つて

數十日の間彼の後を慕ひつゝ

地にひれ伏して教へを乞ふたのに

また何事も教へずに去つて了ふとは

餘りにも無慈悲だ。残酷だ

いや俺は弄ばれたのだ

ようし。みてをれ！

もう何人をも待むものか

彼も人。俺も人





無數の先哲も皆人間なのだ。  
自力。自力。自力あるのみだ。

憤怒の焰熱も漸く冷め

涼しく冴えてまた彼の両眼に

その時映じたものは何？……

伏してゐた彼の周圍の土の上に

愚堂禪師が描いてくれた圓の線

や、圓！……圓の……

俺は圓の中に居たのだ

始めなく、終りなく

無限にして一に歸す圓の線

押しひろげれば天地のすがた

縮めて見れば自己の相にもなる

天地も圓。自己も圓。

奴もまた圓なのだ

行話りも。凝結も。

迷ふ心の影だつたのだ

……  
お、！。和尚！。恭けない！。

感激の叫びと共に

武藏は疾風の如く駆け出した

禪師の後を追ひながら……

圓線に結ばれた清浄な月が

初秋のその夜を照らしてゐた。

(一九四一—七月羅奇新報

紙上に發表せし草稿) (終)

「心からすきであるとか、景仰

してゐるとか、とにかく自分

の血液と、何ものかのつなが

りがなければ、その人物を、

心から書いてみることはで

きない。」

吉川英治



隨想斷片

次女



深田敬

来る。

モスキドの林から、又ハ琵琶、詩吟、謡曲等々、長短合和し流れて

朝の沙漠は美しい趣味の樂園であり、大和人のもつ奥床しき心の姿である。何時迄も、何處迄も、一絃の豎琴にすがる少女の如く、はらからは最後まで望を捨てないで、がんばらねばならぬ。

晩年のダ・ビンチは確に淋しかったであらう。後輩ラファエルは民衆の焦点となり、信じ切った愛弟子も彼を捨てた。けれども鋭い心眼と、不勤の信念の持主である彼は未知の確信をもつて普通の真理境を彷徨ふたのである。

巨匠芭蕉は、旅に病み、夢に訪ね、聖樂ベートベンは病床に伏して、若いシューベルトの樂譜に神の聲を聞いたと云ふ。私共もその片鱗でも伺ひたい。



先輩の御婦人曰く、『キリストと佛陀は恰度反對ですね、それに谷口さん、あれは少し書き過ぎますね』さうですか、と私は答へました。さうではなくて凡てが、『相』ではないでせうか、貴方の心に映じた相でせう。各自が『持』フレンズに寫る宇宙心の姿で有り、その一端ではないでせうか？。

戀愛とおふ杯は、人生に興へられた久遠の悦びであり、無上の酒である。飲めども、つきない、酔へども醒めない、感激のドラマである。けれども失戀は、ほろ苦き影を心に残し、不倫に失すれば、無始、無終の嵐に苦しむと、聖ダンテはおふた。

天は朗かに唱ひ、大地は豊かな肌を現はして微笑む。何を好んで砂を喰み、灰色の人生を歩む必要があらう。

大人でも子供でも、自然を切り下げて行く人であつたら、宇宙大の我を創造せんとする人であつたら、如何に小さい業であつても、その手、その足、その身体の何れもが、神の心の現はれであり、佛の姿である。

私共は坐して真心から、合掌せねばならぬ。

(終)





鴉子

朝食には早い、朝の一刻を散歩するともなく家を出て、木立の中を歩いて見る。

深い眠から目覚めた如うな自然の中に、小鳥の聲を今朝は何時になく落着いた氣持で飽かずに聞いた。

モスキドの林をぬけると無限の平野が続いて、紫色を帯びて明けてゆく山脈からは静かな朝のリズムが流れ出る如う。

多忙な生活に追はれてゆく私は暢然とした此空氣の中に消えてゆきたい如うな誘惑を感じた。

瑠璃色の空の一角からは柔かい金色の陽の光りが流れ出て、モスキドの葉末から微かな静風が吹いて朝の冷氣が身に沁みる。

尊ひ。氣高い。



此姿を見た瞬間、キャンブ生活からあたへられる息苦しい感じも失はれて生くる事のよろこびを想ふ。

例へ様のない静かな清涼な朝のひとときである。

♪ ♪ ♪

釣に行くらしい三人の若い男の人が竿を擔いで聲高に談笑しながら、足早に通リ過ぎて行つた。

これが收容されてゐる私達の日常生活であらうか。

先頃まではまだ子供くして居た若い人達も適齡になるのを待つて居たかの如うに、今は軍服に身を固めて青年の團に、がっしりと進んで居る後姿を想像して、不圖一つの暗い影が私の胸裏をかすめていった。

外川さん「『とらはれぬ心』を聯想しながら、私は雑念から遠ざかつて静かな朝の空氣をそつと抱きしめて見た。(終) 七月十六日記

●考へる者のみが自由であり、又獨自的である。

●愛がなければなんら苦惱はない。

●女を愛さぬものは人間を愛さぬものである。

フ  
オ  
イ  
エ  
ハ  
ッ  
バ  
ル



詩

生活断章



片井溪巖子

—雨情凡通—

風の流れよ。みどりよ。  
はやい高原の 雨脚よ。

◆

轟然と雹彈もまぢりて、

タ立する窓の浅り、

ないもつづくしの涼しさ。

◆

よみがへるもの、

雨音は 大地にしみ込む。

◆

しきりに犬が吠んでる、

青葉の玄關もふつてゐる、

そつと 覗いてゐる。

◆

草花とよろこぶ雨は、

ちかく雷鳴する 稲光りする、

さあ 重い靴ぬぐうよ。

◆

夏瘦を 鏡へ、

ゆるゝ桔梗の一輪と、

禿げのこりゝ顔。

◆

ぬれて 着かへる、

汗くさいからだ。

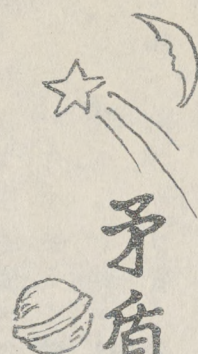
◆

葉に葉に 雫する、

七き ちゝ はゝ の、

こゑする ゆうやみ。(七夕、念一宵)





## 矛盾と變化



谷本晚香

人間の爲す事を見たと矛盾してゐると思はれることが實に數限りなくある。一方では鹽に人を殺す大砲軍艦爆撃機などの武器を製造して居るかと思へば他方では敵の負傷兵までも態々大金を投じて病院を建築して、澤山の医療器匠藥醫師看護婦等を置きえを親切に看護する設備に骨を折つてゐる。

此所では敵が再起出来ざる迄の戦闘を續けて居る。彼所では人道の爲一日も早く戦争が止む様にと祈願して居る。板切れ一枚盗んだものを罰しながら大きな身代を横領した者を許して置き、博奕を嚴しく禁じながら馬券ルエヂヤテケツの類は之を許してゐる。其他、國の富が増して生活が次第に困難になり教育が進んで罪人が益々増加し、医術が進み年々病名の発見が殖え、衛生が喧しくなつて幾々人間の身体が虚弱になるなど人生は何れの方面を見ても殆ど矛盾だらけの様に見受けられる。然らば自然界の方は如何かと云ふに矢張此所にも人の見て矛盾と考へることは澤山ある。例へば生物が絶えず繁殖しやうとすれば他方では之を盛に喰ひ殺して居る。果實を生ずるために花が咲けば又嵐が之を吹き散らし無効に終らしめる。草が芽を出せば虫が食ひ虫が成長すれば鳥が来て啄む。斯の如く生物界は徹頭徹尾闘争である。斯様に人間社會にも自然界に



も一見して矛盾らしく考へられる事は多数に存在するものである。而して眞に相  
 矛盾して居るとある場合でもその由來を究明して見れば、矛盾を生ずべき理由  
 があつて其結果として矛盾が生じたのである故矢張因果の規則に従ふた現象で  
 決して絶たず矛盾ではない。此等は恰も水が流れるとか火の燃えるとかあるの  
 と同様の現象である。若し之等を矛盾と稱するならば水が蒸發して雲となり雲  
 が凝固して雨と成るのも、亦樹木の葉が同じ緑であつても花の色が白紅黄と種  
 々異なるものをも矛盾と呼ばねばならぬ事になる。凡て変化とは今迄あつた舊  
 い状態が消えて今迄無かつた新らしい状態が現れる事である故前後を比較すれば  
 其間に必ず相違せる所があるが、此等は單に變化と稱すべきもので之を矛盾と  
 云ふべきではない。自然界の現象で矛盾の感じを起すものも斯く見てくると何  
 れも變化と名づくべからず、自然のばかりで矛盾と見做すべきものではない。生物の争闘も  
 之即ち種族の生存競争と避くべからざる事であつて他の迷惑を顧慮してのみ居  
 られぬのである。凡て今日は團體の利益に重きを置くが各自の利益を第一とす  
 るかの相違に基いて居る。汽車や電車内に喫煙は御遠慮下さいと書いてあるの  
 は團體の利益の爲に各自の者が暫時辛抱する様にとの要求であるが此の揭示を  
 尾目にかけて平気で煙草をのんで居る人は自合さへよければ他人の迷惑などは  
 少しも構はぬと云ふ根生の見本である。公園の樹木の枝を折り取るべからずと  
 云ふ札があるのは矢張團體の利益の爲で之を折り取つて自慢してゐる人は自己の  
 利益の爲である。

人間は元來社會的の動物であつて協同團體を造らずには生活が出来ぬ故何と



かして團體生活の出来る様にと努めて居るが、一方には私慾が頗る強烈である爲に團體生活の根本義に正反對の事を行つて居るの下人間社會の矛盾は主として其爲に起るものではないだらうか。之は自然界の矛盾らしく感ぜられる事柄とは違ひ眞の意味に於ける矛盾である故。其結果は互に相衝突し相滅殺するを免れぬと思ふのである。然らば自然界に眞の矛盾がないのになぜ人間にのみ矛盾があるか。之は即ち人間が今日已に進歩の下り坂に在る故である。下り坂に在る動物には上り坂の項に榮達した性質の残りとして下り坂に成つてから榮達した性質とが同時に備はつてある故に其爲す事には矛盾がない譯にはゆかぬ。

一人の身体の内でも各部の働きに矛盾があれば其人は病人であり、一種族の生活の中に矛盾があれば其種族は退化の途にあるものと思はれる。榮枯盛衰の原因も此規則に外れるものは決してない様である。

以上今日の人間は自然を征服し得たと云ふて、大に得意がつて居るが自然に對して未だ甚だ微力なもので人間自身の身体に關しても、社會生活に關しても、未だ當て著しい改良を爲し得た例の無いことを思へば人力に依つて人間生に於ける矛盾を除き去ることは到底容易な事ではなからうと思ふものである。(終)

## 二宮公羽夜話

人生に益なき書は見るべからず。自他に益なきことは爲すべからず。光陰矢の如し。人生は六十年といへども、幼老の時あり、疾病あり、事故あり、事を爲すの日は至つて少なければ、無用の事はなす勿れ。





# 隨筆乙ほろぎ

大月喜三郎

新鮮味豊かなボストン文藝の七月號を嬉しく讀ませて頂いて居ります。

どうしたことが今年に蟋蟀が大変殖えて眞晝間でも鳴いてゐます。こほろぎはとても人なつかしい姿と見えて、室の中まで這入つて来て、物かげてキリキリと鳴いてゐるのです。私の心の澄んでゐる時は非常に可愛らしく聞えますが、べのくさくさしてゐる時は騷々しくつかみ出したくなつて来ます。

妻がこほろぎは着物を噛むから捕つて出した方がよろしいといふが、晝間はなか／＼見つからないのです。夜になつて私達が寝る頃になると鳴き出して来ると、つかみ出してやらふと思つて、燈をつけると、はつと鳴き止んでしまふ。暫くがくと音も立てず待つてゐるとまた鳴き始める。とても澄んだ聲でキリキリとやるのです。足音を立てずに近よつて見ると、さほど大きな聲でもなく、澄んだ聲でもないのです。兎に角つかみ出してやらふと思つて、もう一歩といふところに來て、足をすりよせやうとしてスリッパがカタツと足からぬけ落ちた。もうそれっきり鳴き止んでしまつて一向鳴かない。蟋蟀も人の氣配を知つてゐるのです。

暫くして眠らふとするとまたキリ／＼鳴く。少し離れて聞くと實によい聲で



ある。……静かにスネツケをひねって、前にはスリツパで失敗したので、今度は跣足で猫のやうにして近寄つて見ると、寝る前に子供が遊んだ玩具の下で鳴いてゐるのです。もうしめたものだ、逃がすものかと思ふと、またほつと鳴き止んでしまった。そつと玩具に手をかけて取りのけろと、ゐた／＼黒い身体をしたのが、飛びもせずにあつとしてゐる。手をひろげてパツと襲へば、手のとがぬ先にポツと飛んでしまつた。それと思つて逃げた方を襲つたが、蟋蟀もなか／＼速い、燈かけの暗い方へ飛んでしまつた。

妻がクス／＼笑つてゐる。強度の近眼の私が、眼鏡をかけるのを忘れて、うす暗いところで真黒な小さな虫を追つかけてゐたうだから、とう／＼一匹のこほろぎに愚弄されたばかりで、二度とも失敗に終りました。幸なうはその蟋蟀であります。それから後もそのこほろぎかどうかは知りませんが、毎夜物かけで私には遠慮もなく、キリ／＼キリ／＼と鳴いてゐます。

又藝誌への御禮状が、つまらぬ蟋蟀退治の失敗談になつてしまいました。失禮をお許し下さい。御地も喉を暑いことδεせう。こちらトパスも暑くて閉てゐます。

後畧 (終) 一九四四——七月二十四日

### (註釋)

これはトパス收容所に在る大月氏からの私信であるが、大変面白く讀ませて貰つたので、『こほろぎ』と題をつけて、隨筆として皆さんに紹介しました。無断で此等に出でた事を同氏に謝します。(A・T・生)



七月、歸揭載外川明氏の「<sup>こ</sup>とらはれぬ心」を一讀し、一種の同感的興味を覺えた。心と念波、物事に一々捉はれぬ心境に入ること。案外調和のとれる氣樂な日常生活に親しむことが出来さうな氣持ぢがする。

捉はれぬ法と云へば今一つ大きな問題が残されてゐる。云ふ迄もなく宗教でさへ持て余して居る「死」の事である。要するに生死の恐怖感を潜在的に捉えて居る以上、百事に行詰り物事がどうも面白く進行しない。勿論私の云ふ進行とは人生上の倫理的乃至向上方面の意味だが、兎角吾人の日常生活の進化的方面を一つ振り返つて再吟味するに、事を論ずる場合、

又は高き場合、何から何まで或る程度の一種の生死

## 隨感 假葬儀 一 岡本 稔

的憶念的の恐怖心を常に具備し、表

に臨み、境に從ひ、その退化的具象化は敢て自認のみに非ずと信じ、左に述べんとする一説は或る和尚の射の好材料ともならん。即ち人間生きて居る内に、試に一度假葬儀を行ふべしと。一度死せる者にはもう旧銭はない。勿論肉体もない。物質体のない者に死はない。死のない者に恐怖のあらう筈がない。既に汝に障礙なく眞の更生生活に入る敍取りは斯くして何物にも捉はれぬ調和のとれた誕生を期しての再出生にある。勿論その死にも捉はれぬ手段としての假葬儀と云ふ意味を誤解されたい事が予心であるとかふ事は申す迄もない事である。(終) 四四年七月末、夜明の頃。





# 生活短章

松原信雄

我家、ブラツク4。ビルデング12。アパルトC、ブラツクといひ或はビルデング、アパルトと呼ぶ。繁華な大都會の美麗な近代的建物を聯想させるのだが、左に非ず、既に讀者諸君御承知通り、鳥も通はぬ佐渡ヶ島ではないが、鳥も通はず、草さへ生へなかつた沙漠の中に、建設された戦時新興都市ポストンの黒いバラツク。ニグロ娘が御化粧したやうに土埃で厚化粧したターペーパの我家である。その入口階段に板を敷かせ、それに片足を乗せて前屈みになり、極めて非藝術的な恰好で鋸を使って居ると、「おい棟梁、よく作るぢやないか。今度は何を造るんだい？」と遊びにきた友が聲を掛けた。「よく作る。」さう言はれて見ると成程よく作る。ポストンへ来たお蔭で、板片一枚満足に切つた試しのない僕でさへ、生活上の必要に強請されて、止むを得ず、大エさんに成つて椅子、テーブル、棚、クローゼット、ベビーベッド、靴箱、シンク、さてはアイスバツクスに到るまで、板片を拾ひ集めたり、借りてきたり、或は頂戴したりして可成色々の家具を作つてゐる。



想ひ起す二年前、常春の樂土、加州はタハンがなる。別荘で悠々自適中、突然華府當局の命に接し、アフリカよりビヤ沙漠よりは暑いといふ此處ポストンへ赴任して、住宅課長クロード氏に、「これが貴下の御名です。」と案内され、暫めて這入った我家には弟や妻が作った小さい棚が二つ三つあつたきり、家具らしいものは一つもなかった。『どうせ戦時中の假住居だ。暫しの間だから。』と不自由を忍ぶ大奮發心を振ひ起して、何もしないでゐたならばどうだらう。

『必要は發明の母である』と謂ふ。必要に迫られて木片や釘を拾ひ集め、工支を凝らし、腕を振つて炎熱の下、汗だくとなり、砂埃を浴びるのを物ともせず、一つ、二つと作つて行つたのである。初めは、一時の間、に合へばよい。と極めて粗末に作った家具が、生活が意外にも永くなるにつれ、それでは満足できなくなつて、ポストン技術學校速成獨習科で練へた腕に燃をかけ、よりよい物を作り代へたり又更に、あれも要るこれも欲しいと新しい慾望に驅られて別の物を作るのである。一を得ば二を、二を得れば三をと、人間の欲求に限りはない。慾を得ば地位を、地位を得ば財産をと對象は次から次へとその姿を変へて人間の心を捉へ、彼や彼女の心身を活動させて止まらなことを知らない。憧れ求むる心、それが生命なのだ。求めても、更に以上のもを求めて止まぬ心こそ、人間社會を進歩發展させる原動力なのである。

牧者にひかるゝ小羊の如く、我等がひかれて来た當時ポストンには一本の草



花さへなかつた。が今日、ポストンには春夏秋冬、四季の草花が、惱み多い我らの心を慰藉してくれやうと色とりどりに咲いてゐる。家々の軒には眼に快い緑したゝち柳やカフトンツリーが災害を告げてくれてゐる。

よりよい生活を求める我々は、終に炎熱地獄の砂漠を征服したのである。

よりよい生活を求めて止まぬ理想がわれらの心底から消えないうちは、どれほど苦難に遭遇しやうとも、どんな悪い環境につき落されやうと、それを突破してゆく力が湧いてくるのである。さうして個人としても民族としても、それに依つて益々鍛へられ磨かれ、偉まくなつてゆくのである。(終)

## 原稿募集

### ▲秋が理想郷

- 貴方はどんな生活を理想としておますか？
- 又どんな社會に住みたいと思つて居ますか？
- それを具体的に描いて下さい。 編集部

### 募集規定

- 右一行十七字詰、十八行用紙六枚以内。
- 原稿締切 九月二十五日。
- 原稿には住所氏名を明記して下さい。
- 宛名はポストン文藝協會。
- POSTON. POETRY CLUB,  
UNIT I, CITY HALL,  
POSTON, ARIZ.
- 發表 本誌十一号
- 原稿は一切寄送戻致しません。
- 創作 隨筆、詩、短歌、俳句、川柳、其他。
- 幾篇應募さうも自由であります。
- 原稿締切は毎月廿日限守。





## 二世の悲戀

芳川積三

世界のパラダイス、常春の南加もまだ春とは名のみ、街路樹も芽ぐみに間がある如月の半ば頃から、眉目秀麗な一日本人青年が何時も夕暮九時になると、羅府小東京からパサデナ行の赤電車に乗り、温室育ちの色とりどりの美しい花束を手にしてパサデナの終点で下車して、白人墓地の方へ唯一人悄然と消えて行くのであった。

始めは誰か気づかなかつたが、雨の日も、風の日も毎日くそれが續けられたので終に日白人の間に噂が高まつていった。是には實に聞くも哀れな傳

ない戀が秘められて居たのである。

此の青年は帰米二世で、両親は曾てはサンタ・バーバラ方面で人に知られた豪農、七八年前一家を纏め故山廣島に錦を着て帰った成功者濱田時松氏の二男坊省次である。

彼は窮富な日本の生活を嫌つて東京の門大學を中途退學して、オレンゲの番薫る憧憬の出生地、南加へ来たのは四年前である。

故國を出る時彼は父から、

『俺は四十年間アメリカで苦勞した甲斐があつて、今では人並の暮しが出来た様になつたのだ。お前もアメリカへ行く以上親や知人に頼らずに腕一本腰一本で叩き上げて来い。その代りに多少の資本は融通してやる。』と諭された。



米國へ来てからは、齟齬せず半年ばかりのつくりと各方面を視察し今後やるべき事業に就いて色々熟考して是ならん、バサデナに恰好な場所を見つり鉢植や切花の店を開いたのである。

幸ひ場所がよかつたのか、豫想外に店は繁昌しサンタ・バーバラから竹馬の友見玉、林の二人を招いてヘルプをして貰つてゐた。

緑は野山を掩ひ、鳴く小鳥の聲もいと長閑に、色とりどりの花はその美を競はんと咲き出る春も蘭な、殊に見ても清浄な氣持を唆る百合の花の出盛りのある日四時一寸廻つた頃、南加州特有の俄雨に襲はれ、五六人の白人が店先に駆け込んで雨を避けた。

省々は愛想よく、

「さあ、皆さんさぞお困りでせう。」

狭い所ですが遠慮なくこちらへ這入つてお掛けなさい。通り雨ですからすぐ止むでせう。

この人々は皆この近くの町内、遠くとも四五ブロック離れた町内に住んで居る人々で、勢ひ先の降りらしく見受けられたので。

「皆さん、雨も真降りになつてしまつた様です。一度私の所の自働車が店先に出してありますから、お送り致します。まあ、いかに、御遠慮には及びません。さあ、さあ。」

彼は氣輕に皆を自働車で送つてやつた。

その翌日の朝店を開けると、目の覚めるやうな妙齡の娘が這入つて来た。そして省々に、

「お早うございます。昨日は大きに」



有難う御座いました。

と御禮の言葉を述べた。

省次はなぜか吾にもなく、狼狽へ氣味になつて、

『どう致しまして。わざわざお礼しいつにお寄り下さるんでも宜しいのに』と口ごもりながら云つた。

それが縁となり、それ以来朝夕その娘が言葉をかけて行くやうになつて、省次にとつてそれが何よりの樂しみとなつた。何かの都合で娘の姿を見ない日は一日ぼんやりとしてしまつて、淋しくて堪へられなかつた。

月日が経つに連れだんぐ心憂くなつて、お客の居らない時は一寸立寄つて冗談の一つも云ふ様になつた。

此娘はスーザン・ヤングと云ふて年は二十一歳で、ナツシユ百貨店の社入部

長の秘書を務めて居り、父親は此町の顔役で消防長であつた。母も健全で兄が一人あり可なり裕福な家庭であると云ふ事を彼女から直接聞かされた。

夏もいつしか過ぎ、初秋に入つて菊の花がぼつ／＼市場に顔を現すある日、いつもより早目に彼女は店に立寄つた。

『省次さん、少し相談があるのです。聞いて呉れない。』

『えつ、私にですか。』

『もちよ………』

『スーザンさん、あなたの御相談なら、僕どんな事でも聞いてあげます。』

『あ、ね、今度の日曜どこか一緒にドライブして呉れない………』

と云はれて省次は嬉しさがぐつと胸に込み上げて来た。うはずつた聲で彼は、

『僕こんな嬉しい事はないですが、』



あなたのお家の人々やお友達にあとで何かおはれはしませんか。」

「そんなことなんでもありませんのよ。」

「さうですか宜しくございますとも、

そしてどの邊がいでせうか。」

「あなた、どこか閑静ない、とこ知

らない。」

と去はれて暫く省次は考へて居たが、

やがて、

「さうですね。何なら少し遠いで

すが、僕の生れ故郷サンタ・バーバラ方

面は清流にフィッシングも悪くはない

と思ひますが、氣候も此方よりずっと

温いですよ。」

と去った。

「すてき。」

「それではあの方面にしませう。お

辨當や何かは全部僕に任せて下さい。

そうして朝少し早いですが六時頃僕す

っかりは度して此先のシティー公園の南

側にパークしてお待ちして居ります。」

「オーケー、お約束しましたよ。」

さう云ひ残して彼女はよくと出て

行つた。

省次が店の忙しいうにも関らず、彼

女と話に夢中になつて居るのを苦々し

く思つて居つた友人二人は、店を閉め

てからいつもの様に裏にある居室で三

人食卓についた時、

「省次君、僕等二人は君の親友とし

て是非聞いて貰いたい事があるのだ。」

と友人の一人が言つた。

「何だね、今日は大變改まつて居る

ぢやアないか。」

「君は僕等友人間で小さい時から頭

がズバ抜けてよかつた。第二の濱田時



松になると云ふ事は僕等の間では誰も信じて疑はないのだ。」

『馬鹿に今晚はお宝砂をかけるではないか。』

『茶々を入れずに真面目に聞いて呉れ。君は消防長と娘と大分心易くなつた様だが余り深入りをするのはどうかと思ふね。僕等二人は決して妬くの、何ぞと云ふ野暮な心は微塵も持つてゐないのだ。寧ろ君の艶福を祝福するものだ。が、然し、君がまだアメリカへ歸つて来ない時分、中加のオロサの地主の娘と戀に陥つた日本人が、密會して居る所を地主から粗撃されて負傷し、娘はそれを悲觀して自殺した事件があつたよ。あゝいふ事が君に起らないとも限らないからね。僕等はそれを心配して居るのだよ。』

『ありがと。』

省次は友人の率直な忠告には感謝するものと、頭の中は彼女の事で一杯なのをどうする事も出来なかつた。

『氣を悪くせず、もう少し僕等のおふ事を聞いて呉れ。この先の角にグロツセリーをやつて居る井上さん、あの人は此町の草分だつてね。あの人の話ではあの娘は近御近お切つての美人。ナツシユ百貨店に居る何百人かの女店員のナンバーワン。昨年の美人投票で榮冠をとつた娘で随分方々から求婚せられるが、どうしたものか頭を縦に振らないばかりでなく、白人娘には珍らしい愛人もないさうだ。いつも経事屋連中がおんさ／＼と取巻いてゐるとの事だ。だから小野の小町ぢやアないかとの噂もある位だ。』



『アバ……まさかお。』

と笑ひながら、省次は快い幻想に捉はれるのであった。

『だから猶危いのだ。如才もあるまいが氣をつけて深入りして呉れるなよ。』

『省次、安心して呉れたまへ。馬鹿な真似はしないから。』

省次は友人達の忠告にはさう答へるより外はなかった。

太平洋は荒れ<sup>ぐ</sup>るらしく、海岸線に沿ったハナウエー百一號は強い潮の香が漂<sup>は</sup>つて居た。

坦々たるハナウエーの朝靄を突いて疾走するまだ新しいビュイツクセダイン、サンタ・バーバラ町から北寄りの横道に外れて車を止め立出た日本人青年と白人娘、少し顔を火照らしながら無

言に鎮きつゝ釣道具と鞆當を持って溪流に沿ふて木立を縫ひ奥へく<sup>へ</sup>と行くのであった。人里はなれた恰好な草原を見付けると省次は、

『スーザンさん、此邊で一休みいたしませう……』

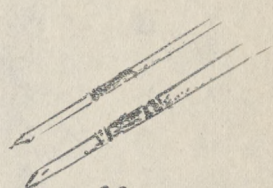
と云ひつゝ、二人は持ち物を草原の上に投出し、ほてつた顔を見合はしてニツコリと笑ひ合つた。その瞬間固く二人は抱擁して、どちらからともなく互に熱い唇をよせて、身悶しながらしはし離れやうとはしなかった。

『スーザンさん。』

『省次さん。』

二人は上ずつた聲で名を呼び合ふのみ、それから神のみが知る夢の國に遊んでゐるのか、息遣ひがせゝらぎの音に消されて行くのであった。(續)





# 物外和尚の豪勇

土屋天眠

幕末の頃備後の國に、曹洞宗所屬の僧侶にて、世人より拳骨和尚と綽名され、雷名を天下に轟かしてゐた。大力無雙の豪僧。物外和尚の有つた事は、天下周知の事實で、今猶歴史に赫々たる偉名を謳はれてゐるのである。

彼は伊豫の國松山藩の家臣として生を亨けた一藩士で、其祖先を訊せば遠い。元龜、天正の戰國時代は、軍學兵法の達人として、名聲を四海に馳せてゐた。甲州の領主武田信玄公第九世の孫に當るのである。

彼は又天性磊落にして博學多識、才氣喚発、縦横自在の天分に恵まれて居る而已ならず、詩歌、俳句、書畫等の

如き風流優雅の道にかけても造詣最も深く、更に又武藝の方では、宝藏院流の鎗術から、大坪流の馬術、剣道の蘊奥に至る迄、修養と鍛練を積んでゐた稀代の豪僧であつた。

彼は又當時氣合術の達人と呼ばれて、名聲を博して居ただけに、氣合術の強さは堂に入つたもので、天下無敵の豪の者であつた。故に彼が一度無念無想の境に入つて、渾人々の力を二本の指先で込めて人の背に當て、一喝するや否哉、如何に日頃豪強無比を誇つてゐた壯漢と雖も、其場にふんぞり返つて、人事不省に陥るのが常であつたさうである。

彼は又或時姫路侯の御前に召されて、御前揮毫を爲すべく、將に筆を下さんとする一刹那、突如壯漢の手によつて、数本の鎗、穂先が、彼の面前に突き出された。すると彼は大喝一聲、カーツ



と獅子吼したが、壯漢等々身体は一時に辣みよつて、恰も不動の金縛りに逢つたも同様の状態であつたとの説である。

又或時彼は三原侯の御召しに依り、

御前に伺候した處、折しも一畫家が席畫に呼ばれて、孤雁の繪を書き上げた

處が、孤雁の繪は古来より、國乱不吉

の兆として、言傳へられてゐる處より、

大に三原侯の御機嫌を損じ、御不興を

買つて居た處へ、物外和尚はすかさず

氣轉を利かして、早速筆を執るなり、

墨痕鮮かに畫面に賛をしたのであるが、

其實の文句は、

初雁やまだ、後かうも

と云ふのであつたが、三原侯は此句の

意味をしみじも御耽味遊ばして、恭

悦斜めならざりし模様であつたとの説

であるが、之ありしが爲め、畫工は幸

ふじて其苦境を遁れり事が出来たので

ある。

因に一体禪師の詩にも此の句と、略  
ば其意味を同じうしたものに、下記の  
如きものがある。

一雁呼友作兩雁 三雁四雁五六雁。

雁去雁来無限雁 雁々々々々々々。

猶物外和尚には前記の初雁の句の外に

も、名句が許多あつて其中にも、

武藏野や離れに時雨けり。

極樂もこの通りなり盆の月。

君が代は本で搦へた芭蕉太刀。

などの句は今も尚人口に膾炙されてゐ

るのである。

(終)

追記

次回には當時新撰組の鬼隊長と

呼ばれて武勇を天下に謳はれて

ゐた、幕臣近藤勇と拳骨和尚

の兩雄が一道場に立會つて、雌

雄を決する龍攘虎搏の、一大

活劇の場面を紹介する事はする

であらう。





# 武將の風格(三)

梶原景季

長谷川生

軍談や琵琶法師などに依つて、宇治川の先陣、佐々木四郎高綱が、古來大に賞稱せられた趣きまであるが、私は高綱はあまり好かず、寧ろ敬愛を梶原景季に捧ぐるものである。

時は元暦元年正月、京都で狼籍を恣にする木曾義仲の討伐に向ふ義経の軍勢は、怒濤の如く宇治橋へ殺到した。併し橋は既に敵のために切断せられて、施す術もなく、河を渡らんが、其底には乱杭を打つて大綱を張り、逆茂木をつないで流しかけ、白浪津く立騒いで、陰鬼の状勢、流石千軍万馬を往來した。

東國の勇將共も、困惑の体にぞ見受けられた。折しも平等院の小島ヶ崎より颯爽として駆け出したる二騎の武者、先なるは頼朝の愛馬磨墨すりすみに跨つた梶原源木景季、通れたるは之れ又將軍家第一の名馬生時いけづきに急驟の姿を運ぶ佐々木四郎。高綱は後より声をかけた。

「貴殿の馬の腹帯は延びて見ゆるぞ。河中で鞍踏み返へし敵に笑はれ給ふな。」  
あはれ梶原は眞事と思ひ、腹帯を締め直さんと馬を止めた其隙に、佐々木はツと追越して馬を颯と河へ入れた。たばかられたりと梶原も續いて乗り込んたが、高綱先づ第一番に彼岸に上り、「近江國の狂人佐々木四郎高綱、今日の宇治川の先陣ぞや。」と鎧ふん張り大音聲に呼はつた。その叫びもまだ終らぬ瞬間に景季も對岸に



馬を打ち上げたのであつた。

諸君は果して之を何と見らう。武士として最も恥すべき行為、戦友を欺きて、くちへし佐々木の先陣を天晴れ勇壮なる名譽となすべきか、之に反して梶原を親よ。

主は忠なる所以は徒らに高名を揚ぐるに非ず。全軍の勝利を導けば足れりとの態度を採り、高綱に怨一言謂はず、彼れ是れする時をも惜しみ、進んで敵に斬り込むことに専念したるに非ずや。

この空名を顧みざる眞の武辺源太景季にはまだ美談の續くこそ歎しけれ。

その壽永四年二月平家の第二の都、福原の東門生田の森に奮戦大に努めた時の話で、梶原景季は鹿の角打つたる彼が家の定紋の冑を戴き、裾濃青糸織の鎧に大太刀を佩き黒鹿毛の逞しきを托はせ長鎧を振ふて血戦奮闘する姿の勇ましく。

殊に背に今朝咲いたばかりの馥郁たる梅花香ばしき数枝を挿して飾りしを羨しかりける。敵を斬崩したる後戦友が、背の梅花は旗指物の代りなりしか、將た又單に洒落なりしかと問へば、景季莞爾として答へけるは、

「うんあれが、あれは俺がまた戦死せずして奮闘する様を親父に一目瞭然たらしめ、無用の配慮をさせざる爲なりし。」

とは其孝心の香ばしき、正に梅花と薰風を競ふもの。その父景時の便佞邪智なりしに引換へ、其子景季の豪壯淡快、眞に花も實もある武夫なりしなり。

斯の景季は又文治五年頼朝自ら陣頭に立ちて、奥州の藤原泰衡を征伐せし際に従軍し、しかも將軍の馬前に進みたるが、般城國白河の関を越えんとせし時馬を控へて、



秋風に草木の露を拂はせて

君が越ゆれば関守もなし。

と詠じて居る。蓋し藤原泰衡は當時白河の関を以て頼朝に對する第一の固めとして防衛して居たのに、今や將軍の威風に恐れて、否寧ろ先鋒梶原源太の豪勇に倣易して、一戦も交へずして退陣したるならんも、例の快勇源太景季はそれを自分の功名として誇らず、之を頼朝の勢威に帰して、

此歌を朗詠したる所、何ぞ高潔にして頼もしき。仰も此戦役は於て滅亡したる藤原泰衡は、素と頼朝の脅迫に因つて義経を殺した男。而して今其義経を殺す事の遅かりしを口實として遂に誅せらる。因果は巡る結尾の頼朝は兎に角として、景季は旧主義経の讐を報ふ万感無量なりしならんと思はる。

秋空暗れて軍馬高く嘶く白河の関、

嗚呼勿來う関と共に有名なる白河の関の、

秋は奈何に蕭條たりしか。又美しかりしか。

能因法師は、

都をば霞と共にたちしかど

秋風ぞ吹く白河の関。

とその悲愁を歌つて居るが、源三位頼政は之に反して、

都にはまだ青葉にて見しかども

紅葉散りしく白河の関。

と詠じて秋の関所の秀麗を想はしむ。

私は鹿の角の宵に青糸絨の鎧を着て、黒鹿毛に跨つたる源太が、満山紅葉の白河の関に迷懷する爽麗と、大鍬形の宵緋絨の鎧連銭茸毛の八幡太郎が山櫻散る勿來の関に吟詠風を怨む情景とは、眞に好一對の畫幅にて、豪壯なる郎宅奥書院の、大床の間を飾るに恰好のものなるべしと憧憬して止まぬものである。

~~~~~(終)~~~~~





争



野田夏泉

筆者は前號にミラーとロンドンを書いた後ロンドンにはあまり世に知られてゐない、『戦争』と言ふ極く短篇物の小説のあることを思ひ出した。今次第二世界戦争を背景としてこの小説も『世界短篇小説集』に収録されてゐる事に氣が付いて紹介することにした。これは翻譯でない。筆者の意譯に外ならない事を諒とされたい。

\*

\*

\*

南北戦争の頃のことでもあらうか。(ロンドンには此戦争の時と處とを明記して居ない) 若い一兵士は特別使命を帯びて、交戦地帯を突破し故郷へ歸ることになった。彼は愛馬に鞭打ち續り、野越へ、岡越へ、何程走ったか？

やうやく着いた所は道もない林である。彼は人目を避ける爲この林を抜け山を越へて目的地に達する決心である。彼は初めて後を振り返つて見たが、自分を追ふ敵もなき事に安堵の胸を撫でおろした。悲愴な戦友の死顔、白い繻帯に沁み出た赤黒い血。まだ生々しい記憶が頭の中に一杯であつた。

それもいつか霧散してゐた。シーンとした密林の静けさ。目を射るやうな日



光に映へる緑の若葉。水の芽の香が鼻を突いた。彼は葉蔭を傳ふ微風に戰慄を拂はせ、汗ばんだ肌に心よく涼風を受けて大氣を肺一杯に吸ひ込ん。危険地帯より脱出した安全感と、大自然の中へ融け込んでゆく心とで彼は何時の間にか平靜に返つてゐた。

密林を過ぎて山にかゝる。此山を越れば人里に出る事も知つてゐた。彼は再び愛馬を勵まして山を越えた。峠より見下す眼下の平野は今朝夜明け出て来た戦場に比して樂園のやうに思へた。緑の沃野、瞬間彼は平和な世界もあるものだと不思議にさへ思へた。今一走りで目的地に着くであらう安堵も伴つてか急に渴を覺えた。彼は麓野の一角に特に緑の樹の茂る一條を見た。そしてこれが川の流れてある事も直感した。彼は川と見當をつけた方向へ愛馬を馳せた。やうやく彼は川岸まで馳せつけた。楊柳は川岸一杯に茂つてゐた。彼は用心深く楊柳の間に馬より下り、愛馬の口をとつて水際に降り立つた。彼は冷たい清水を両手に汲み上げて何バイか飲み乾した。愛馬にも心ゆくまで飲ませた。瞬間向岸にかさ／＼と物音がして彼は確かに人の氣配を感じた。彼は直ぐに銃をとつた。其時對岸の柳の間に髭武者のトランプ風貌の男の顔が現はれてこちらを見てゐた。髭男は次の瞬間手を川水にさし伸べて悠々と水を飲んだ。彼は引金を引けば一發で射止められる位置と距離とに居た。然し今の彼には殺意は起らなかつた。水を飲み乾した髭の男はいづこへか立ち去つた。



彼は自分の使命意識に返った。再び馬に跨つて一鞭打てた。此處からはどうしても村を通り抜けなければならなかつた。彼は大胆に村への方向をとつた。向ふに農家らしいのが見えた。彼はワザと其家に近寄つて見た。宏壮な舊家らしい住宅である。裏に廻つて見たが人の住んでゐる気配もなかつた。

彼は農家の裏に林橋の果樹園を見て、直ぐそこまで馬を馳せた。

よく熟した林橋が澤山實つてゐた。馬より下りた彼は早速林橋を二つ三つもぎ取つては口にした。今朝夜明方よりの空腹に何とも言へぬ美味であつた。

彼は尚四つ五つとつてはボケツトへねぢ込んだ。彼は今一走りとして三度馬に跨つた。トタンにピエーンと一発の弾丸が頭上を飛んだ。ハツとした瞬間彼は二番目の弾丸を肩に受けてドフと馬から落ちた。尚二三弾丸は頭上を飛んだ。愛馬も弾丸を受けたか悲鳴と共に仁王立ちとなつて飛び出した。彼は苦しい眼を開けて弾丸の来る方向を見た。そこには敵が五人馬上より彼を狙ひ打ちしてゐるのであつた。そして其真中のは最前川向で見た艶の男であつた。彼はその艶男の笑顔を見た瞬間意識がだん／＼遠くなつて行つた。(終)

以上は極短篇物であるがロンドンの「食はなければ食はれる」彼青年兵士が川向ふで見た艶の男を一発で射止め得る位置と距離の利を得て居り乍ら一片の慈悲とか道徳観念の爲に其機を逸し遂に我身の破滅を招いたものであると言ふ、ロンドンの人生觀をよく表してゐると思ふ。



文藝  
協會

文月歌會詠草集

永瀬勇選

順序不同

ネブラスカ 赤里 さ と

衣洗ふ吾が眼の前うローンの上を蝶の三つがひもつれつ、飛ぶ。  
温室の裏庭にみつりたる。ピー摘みてキヤベテの青葉に包みもち帰る。  
黄昏れの庭に出づれば吾顔に螢ふるゝが光りつゝ飛ぶぬ。  
十日月光にたつ頃ひねもすの野良仕事より疲れ吾が帰る。

川口 静洋

枕べの月はふけつゝ身にちかくひとつ啼きすむこほろぎの聲。

振袖のかげなつかしき思出を語りあかさん十五夜の月。

手かざみに親しむよはひとなりにけり寫す吾がおもわ母を思はしむ

軍人家族招待會に婦人會幹部として招かる。

み戦つたてとなすべき手あらねばいかでか受けを今日のうたげを。

鵜 湖 綾織 謙介

洋傘二つ横げしかげに初らは海を語りつゝ砂遊びをり。

夕日さす軒端によりて蝶子のむれこまごまともつれ遊ぶかそけさ。



家かけの草生みみゆけば夕光に蟻子立ちしづみ立ちしづみ見ゆ。  
憂然と疎飛ぶ離りて本壘打なり投手唯然と立てるがあらはれ。

クリスタル市 川 原 八重子

母を母の母のみのちつきたりと父よりの便り今日し届きぬ。(六日世)  
八十路まで生きたまひける母なればよはひ足らずとは吾が思はなくに。  
會ひたしと短き言葉添へてあり父のこの願ひ叶へむは何日。  
會ひたしと父の願ひはかなけれみ戦は末だ果てししれねば。

北 林 静 江

身を病めばいそしむ道も遠ざかり唯にしのばぬ恩師の面影。  
一Aに合格したるたくましく吾子のすがたをぢつと見入るも。  
矢天に蟻に興じをる幼な孫よ強くほがらに世に育つべし。  
うつし世の旅路に向ふ愛し子よ夢忘るゝな母の教へを。

清 時 文 子

清流に流されて来し蛙あり幼くなりて石投げて見つ。  
生くる事の如何に難きかも炎熱の沙漠に蟻はせはしく動く。  
朝の行事終へて安けき一と時を子等と見てをり蟻のしぐさを。  
からだよりも大き獲物を運びゆく蟻のと息のきこゆがに思ゆ。



貴家 末子

せんかたの無きにも馴れていつ知らず安けくありぬかこはるゝ身も。

劇樂にこぼり重なる蟻の死骸見つゝし想ふ戦場のさまを。

古きしみとらむと命を傷めける暗衣もいでぬ今日の虫ぼしに。

夕づけに夢もろともに花開じつ明日またひらく睡蓮の花。

大空 魁

榆の木に来て啼く蟬をしみじみとま晝事務室に吾がきゝてをり。

蟬のなく聲きゝてよりしみじみと沙漠の夏を暑く思ひぬ。

激戦の跡の水際に焼け残る椰子の樹あはれ半ば折れ伏し。(戦況寫真を觀て)

コロラド 安井 静女

たらちねはゆめにも戦地思ふらしそのいとし子を氣づかむにつゝ。

兎玉 なを

冷えびえと朝踏む庭にしありありカンナの花の眼にしみて赤き。

朝東風になびき揺れあふ庭本々も姿作しつゝ屋根を超えたり。

ゆくりなくも會ひしこの童ら身丈伸びる言葉かくるに忘れ居るはや。

昨日の如く家族とともに安寝しつゝ息絶えましぬ君がみいのち。(夏の野を憶ふ)

外谷 千代

文藝誌生みて育てし苦も樂も君が一生の思出とならむ。



帽ッラツクに身をかどめつゝ帽ふりて遠ざく君を目もて見送る。  
か弱けく見えつゝなほも季<sup>とき</sup>ながく庭に咲きつぐよペケユヤの花は。  
各國の踊りは續きてハワイ人の踊りの中に長けし吾子見つ。

鈴木 緑松

廿六部落の藤原氏失踪す。

夜遊びに出でたるまゝに吾が友はすでに二つ日を帰り来らず。  
行方知れぬ友を探<sup>たづ</sup>ねむと人々等合圖の鐘に集り来たまふ。  
捜探隊は三年に別れつ我が組は河邊に添ひてブラッシ合け進む。  
屍を索<sup>さが</sup>る川立<sup>かはだち</sup>の面空しく夕日に赤く照らされにけり。

大園 晴子

かそかだる餘韻の耳に残れるは朝餉の鐘に目ざめしか吾れ。  
世の人のいとふ病に臥<sup>せ</sup>る妻にせめて捧げむ吾が真心を。  
療<sup>りやう</sup>中<sup>ちゆう</sup>る日の何日とは知らず病む妻をせはしき身もて日毎見舞ふも。  
真理をばたづね求めてむもとけは心に恥ずる事数多あり。

天形 溪山

汝<sup>な</sup>は國の干城<sup>かんじやう</sup>たれと言ひよどむ親心<sup>こころ</sup>を知るや召<sup>こ</sup>され征く息<sup>いき</sup>は。  
嬉々として友と戯る新兵は憂ひげもなくバスに乗りたり。  
母を置きて遠く行く恨<sup>こころ</sup>は離れ難み涙垂りつゝ面伏せにけり。



永瀬正臣

朝露のしめり保てるハネデエを母はもぎて来ぬ笑顔ながらに。  
納屋ぬちに泥つきしまゝ積まれある瓦に反べりにぶき朝光。  
照り出す日中の道も歩むなり勤めにしあればひるまずに行く。  
國と家とのわきまへもなくあげつらふかなしき事に我あへるかも。

猿渡則子

さ庭べのへちまの花の黄なるが月夜の風にさゆらげる見ゆ。  
堀川の堤夕づきて風さやぐ蘆群中に啼くいこぶあり。

柴田よし

屋根よりも高く伸びたる部落の木々今年に蟬の来啼く聲多し。  
戦場の子を思ひつゝ夜もすがらうまぬしかねつ窓しらみ来ぬ。

島原潮風

戦場の子の陰膳に暑き日は西低も切りて供へけるかも。

永瀬勇

芽をもちてボガラ根づくらし枯らさじと水注ぎやる朝な朝なに。  
燈を消して今は寝なむよと眼閉するに闇に声あげ寄り来る蚊のあり。  
朝夕出の瞳に冷えびえし橘葉のなびかふ上の有明の月。  
部屋ぬちの壁の面てに黄に沁みて今日もをばりの陽がしほしあり。



## 後記

ボストンの夏も七月に入ってから本格的な暑さがやって来た。毎日少外は百十度あたりを上下してゐるであらう。クーラーを廻はしてゐても室内九十度から九十三四度達も上る日がある。此れでは今月の歌會は暑さの爲めに出席者が少なく、淋しい事だらうと心ひそかに思つてゐた。處が今回は特に川口先生のお宅を吾々の爲めに開放して下さいから、と云ふ通知に接しほつと一と安心した譯であつた。實際此暑い最中クーラーの設備の無いルームでは逆も歌會など持たれるものではない。勿論斯云ふ性質の會合は出来得る限り何方へも迷惑をかけない様にするべきだと云ふ事は承知して居るのであるが、つい暑さに敗けて川口先生のお言葉に甘えてしまいその歌會を昨日(廿九日)午後二時より同所に於て催させて頂き、いろいろと先生のお世話になつた事を此處に特記して謝意を表する次第である。お陰であまり暑い目も見ず其爲つゝ良い氣になつて長く饒舌り過ぎ夕餉の鐘の鳴るのに喫驚させられて慌てゝ失禮せねばならなかつた有様は、見てゐた人々には本當に滑稽だつたと思ふ。尚ほ今回は大園晴子氏北林静江氏の二新人の未投を見た事は大変嬉しかった。殊に大園(シネーム)氏は旧東津久仁の誌友であつた由で作歌に對しては既に充分の経験ある人。又北林氏も万更ら初心の人でもなさうな詠み振りであり新ふした力のある人々を得た事は漸く倦怠を来たしつゝあるかの様に見える當ボストン歌會の爲めに實に良き刺戟となり。



清涼訓にもなつたと思ふ現在休詠してゐる人々は勿論今日迄續けて来てゐる吾  
々も、此れを機會に改めて作歌力を旺盛にし此等新人に笑はれない様に勉強し  
て行き度いものだ。終りに諸君の御健康と御精進を祈りつゝ、此事を擱く。

四四 七、三〇、 永瀬生

# 萬葉敍景の歌敍首

柿本人麿

東の野にかざろひの立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ。(萬葉集卷二)

山部赤人

あかの浦に汐みち来れば潟をなみ芦辺をとして鶴鳴き渡る。(萬葉集卷六)

笠金村

山高み白ゆふ花に落ちたぎつ瀧の河内は見れどあかぬかも。(萬葉集卷六)

大伴家持

春の花紅にほふ桃のはな下照る道に出でたつをとめ。(萬葉集卷十九)

安宿王

をとめらが玉蒙すそびくこの庭に秋風ふきて花は散りつゝ。(萬葉集卷二〇)



## 選後隨錄

㊤さりながら我はをみななり世の母ぞいかで辞すべき今日のうたげを。

㊦いつの日か来るべきものは終に来ぬら悲しもよ戦ひ半ばに。

右二首の作㊤と㊦はいづれも其の作者を異にするのであるが、両方共同の様  
連作体に詠まれてあつた一聯の中の作であり、又どちらもよく似た歎点をもつて  
ゐると思はれるので此處に並べて取り上げ未熟な愚生の経験を通して一言物を  
言つて見やうと思ふ。先づ㊤の作であるが斯ふして此前に位して作から此一首  
だけを知り放して見る時に、これは一体何を言はむとしてゐるのであらうか、  
作者の心を動かした原因といふものは何もこの作の上からは讀者は汲みとる事  
が出来ない。其處がこの作の持つ最もな難点だと思ふ。字面の上を追つての意味は、  
自今も女であり世に對しては一人の母であるぞ。だから何うして今日のこの宴會を  
辞さうぞ辞せられるものではないと云ふのであらう。勿論此は連作中の一首であり、  
此作の前にある一首を見れば、此の歌の成つた主因は容易に察するに難くはないの  
であるが其れではあまりに前作に頼りすぎてはいないだらうか。いふら連作の一首であつ  
ても、一首は一首として獨立するだけの内容を備へて居らなければならぬ。連作  
について既に歌壇の諸大家によつて色々と研究され議論も戦はされて来てゐ  
るのであつて、異論兩立と云ふ有様でどちらにも言ふところに一理ある様であるが、  
つまり愚生如き者の考へから言つても歌をなす主体と言ふものは矢張一首、



一首其れこれに備へて居るべきものであらねばならぬと思ふ。聲迹は例を採つて言小様であるが例へば作者が短冊を書くとして右の一首を認めたと假想するか、見る人には解らぬ歌として取扱はれるであらう。まさか二首を並べて一枚の短冊に書く譯にもゆくまい、斯様な平俗なところから考へをめぐらせて見ても短歌は、連作にある無しに關はらず必ず一首一首に独立性のあるものでなければならぬと言ふ事に思ひ至るであらう。又⑧の作に對しても同じ事が言はれる。此儘では上三句の意味が全然不明である。第四句の「うら悲しもよ」とうたはれてるところから察すると、何か悲しい事件の起つたと云ふ事だけ感じられるが、上三句の具象が足りないから、讀者の胸を打つところ逆行つてゐない。此作者はもう一つ二首連作のものを發表して居られるが、あの最後の作の初句「愚生の如筆したところを注意して見て頂ければ愚生の此処に掲げた二首について何を言つてゐるかと言ふ事が解つて頂けると思ふ。

あすあたりたよりある筈証つたきり来る迄さめなと早や床に入る。

何の作を讀んでも大抵の場合其処には略何う云ふ意味であるかといふ位には察する事が出来るものであるが、此作は又何うした事か其れさへもさつぱり解らない。それ故今更ら此処に取り上げて物を言ふ迄もないのであるが、或る人には未だ斯うした作が短歌として受け入れられてゐる様なので一寸注意して置き度い心から取り上げたのである。先日歌會での互選の折りもこの作に点を入れら



れた人もあつたと思ふが、其人は實際にこの作の意が解つて採られたのだらうか。斯うして此作に對し物を言ふ迄には愚生も何回となく繰り返し讀んで、せめて作の底を流れても意味だけでもつきとめやうと随分苦心したが結局難解なものとして片付けざるより外すべがなかつた。四、五句全然解釋に困る云ひ方だ。尚些細な事の様であるが作者は口語体で歌を詠まうとするのか、文語体で詠むのか、先づさう云ふところから心を定めてかゝらねばなるまい。

### 青きほのほあげて蜥蜴は炎天に我が行くみちの前を横切る。

此作も此処で云々する程のものではないが、初歩の方には往々にして誤解され易い缺點を持つてゐる爲、其点を明らかにしたいと思ふ。作全体を言へば先づ無感動で唯三十一字を羅列したと言ふに過ぎぬが、其れよりもつと難點は初句の「青きほのほあげて」といふ奇怪な蜥蜴の表現である。愚生は未だ曾てほのほをあげる蜥蜴を見た事がない。それは認識不足だと難詰せられるかも知れないが、常識から考へてもほのほをあげて這ひ廻る蜥蜴が棲息してゐると思へぬ。これは飛んでもない空想である。作者は特殊な表現だと思つてゐるかも知れないが、これは特殊と言ふよりは奇異と言ふべき性質のもので、此特殊と奇異との區別を穿き違へない様にせねばならぬ。それから前言つた空想と言ふ事も慎まねばならぬ。實寫はいくら拙なくともはるかに空想に勝るものである。以上 (終)



俳句二十八人選集

シヤスタ菊蓐に相押し別れけり。

湖月

夏晝や措きゝなれし大字典。

朝顔や艶を抬げて老支子。

子を抱いて日傘もさしてメスの道。

花萼莖の肌ざはりよき晝寝哉。

竜耳

芦の穂の微塵も揺れず月澄める。

老骨に似たるすかれ葉秋薊

つれづれに佇てる窓邊や鳥渡る。

新緑の枝にゆれ居て小鳥鳴く。

隠居

晩涼やかうりころりと下駄の音。

日覆して育てし夕リや咲きにけり。

睡蓮の葉を袖んでし蕾かな。

さうくどボプラ並木や油照り。

軒並に植えたる梅の若葉かな。

勢路

春水

ペチユニヤや白き家並は統制部。

香虎

競泳や合圖の笛に飛び込める。

葉生りの艶よく熟れし大トマト。 静遊

強東風や窓を閉して内籠り。

縫ふ妻のほつれ毛なふる煽風器。 愚公

繪日傘をプールに吹す乙女かな。

夏宵のバンゲョウ奏でる警察所。 白水

開拓の斧措いて立つ若葉かな。

髭剃つて心やさしや更衣。

韋城

くろきりと片影月や涼み臺。

大セラの寫真撮らばや夏の雲。 天眠

世を忍ぶ老の閑屋や窓の月。

窓際に朝顔めつと首を出し。

森林を歩めば不意に雉子の聲。



熟れトマト葉蔭に一ツ見えにけり。

桃李

草上に夕日ちらつく若葉かな。

愚村

目影に映る新樹の高きかな。

藤田

讀み耽る本にさうく若葉風。

不似郎

朝顔の今朝は一輪紺しほり。

梅夫

胡瓜拾本いはほの細の初ちぎり。

古春

星飛んで話やみたる納涼かな。

緑松

朝露の乾かぬ庭の若葉かな。

筆泉

夕立の雲大空に蒸されり。

筆泉

夕立の雲神鳴と儼んで行く。

筆泉

炎天や徒耳え建ちたる水タンク。

筆泉

漸くに棚に届きしへちマ蔓。

筆泉

炎天や薄むらさきの朝顔の花。

筆泉

朝顔や濯場今朝もにぎやかに。

筆泉

繪日傘をたゝみて橋を渡りけり。渡鳥

ハイキンが音高らかに新樹道。

バス降りて在右に別る、日傘かな。一郎

石炭の色濃く光る暑さかな。蘇村

蚊を打つや掌に走りしは吾子が血か。

ハート山領の裏絶壁や汗ひゆる。青芝

山あやめ憑かれし如く来て佇ちぬ。

稲妻や加州連峯まのあたり。愛石

朝顔の棚に並べるベンチかな。

會釋して先になり行く日傘かな。

初甜瓜を割りて隣へ配りけり。五松

漸くに耳に寄る蚊を仕留めたり。

訪ひて語る芝生や月涼し。

人馴れし栗鼠の親子や松落葉。静居

残雪のけはしき道や若緑。

炎天の真晝や鯉も動かざる。凉水

朝顔の花咲き初めし窓辺かな。

朝顔の蔭に仔細の眠り居る。



俳句 鶴湖拾芥人集

烈日の下照るシヤスタ遠山嶺かな。  
兄弟に一と間ざりなる裸かな。

岩下縣村

夏の朝餌を待つ鷗草に向く。

矢野紫香女

炎天に煤煙なびく大廚。

田中素風

三枚の板こと足る日覆かな。

保田山晴風

夕立に先だつ砂塵壁を打つ。

山田如骨

炎天に動かぬ雲のありどころ。

いねし児に窓の日覆をおろしけり。

鈴木黒光

金踊今宵も老いの留守居かな。

夕立の晴れし裾野や鳩の啼く。

風そよぐ大高原や夏の朝。

今村桃村

草に寝て惚ぶ故山や夏の月。

池永肥州

灯取虫街燈めぐり夜もすがら。

いづながら窓より仰ぐ夏の月。

中谷

ありがたや男に生れまつ裸。

まち／＼の日覆かけたる家並かな。

山本涸川

變装の老いも交りて踊かな。

雨晴れて雲なき空や夏の朝。

藤井元應

炎天や農夫ひたすら培へる。

まお 岩下むつ子

夏朝や涼風うけて深呼吸吸。

粗々のかけ足の聲夏の朝。

森山一空

街立の蔭より應ふ裸かな。

夕立や児をひつかへえひた走り。



ポストン

川柳

島原潮風

古川柳句解

▲田舎醫者使は来たり馬に鞍。

句解 山里の花が咲いたので其使が来た。さあ馬の仕度せよといふ様な雅談もあるが、それとは違つて田舎医者が急病人が出来たからすぐにといふ急使を受けた時、さあ馬に鞍置け。即ち、馬の仕度せいと云つて急いで出發する。町医者であればそれ駕籠とせかすべき場合である。謡曲「鞍馬天狗」花咲かは告げんといひし山里の、使は来たり馬に鞍、鞍馬の山の雲珠櫻の文句取り。

▲横またをとらへて見れば後の母。

句解 夜間街に出て見た所が、横またといふ化物が現はれて、頻りに通行人を捕へやうとしてゐる。これは異名で本當は夜鷹といふ淫賣婦である。自分が進んでその化物を捕へて見ると、豈計らんやそれは父上の後妻であつたには實に驚かした。盗人を捕へて見れば去々の句もあるが、それ以上に自分を茫然自失せしめた一の悲劇であることよ。



▲西行と狩人なとつ店にすみ。

句解 西行と狩人が同一の店に住んで居る。即ち同居して居るとは一寸変なやうだが、それはかうぢや。今戸に来て見ると笠を提げた西行が居る。又一方には鉄砲擔いで犬をつれた狩人が見えるぢやないか。これはおふ近もなく今戸が玆具の人形であるが、矢張兩人同居して居ると見えて面白い。

▲伯良は欄間を見ろと思ひ出し。

句解 漢まの伯良は三保の松ヶ枝から、天女の衣を見付け出した。その縁故で天女と主婦の契りを結ぶに至ったが、後天女は伯良の手から件の衣を取り返して昇天してうったので、伯良は戀慕の情止む時がない。でお寺などへ行つて欄間に天女の彫刻したのを見ると、その度毎に天女の在世當時を思ひ出しては戀しがつて居るのが氣の毒である。(謡曲「羽衣」及び俗傳に據る)

▲ことわりやなどゝ出さうな日がらわざ。

句解 日照り續きで雨乞でもしさうなこの炎天に、見ぬ昔の小町も斯くやと思はれる程の美人の道行く後から日傘を指しかけて居る其形は、小町は小町ながら、神泉苑の小町のことありやと雨乞の歌を詠じさうな姿をしてゐるのを見ると一層暑苦しく感ぜられる。(小町の歌)「ことわりや日の本となれば照りもせめ、さりとては又あめが下とは。」



# 第四拾四回川柳句會

課題『勝氣』 難波桂馬選

天 藤井孫六

言ひ勝つて泣かれて後に淡い悔。

地 鈴木胡仙

負けぬ氣の妻へたしなむ寄附の額。

人 速水白舟

勝氣から時を逸した手術臺。

客

終る迄止めぬ勝氣の娘の豫習。 里江

細腕も勝氣で食の底を越え。 白舟

年頃を持つて勝氣を省みる。 春山

逆境を切りぬけてまた細い腕。 一流

交渉へ自説を枉げぬ女主人。 全

容貌よりも勝氣見込んだ嫁であり。 緑松

さかぬ氣の娘所外ハスに揺れ。 汀村

我意志のまゝに出て行く實社會。 子守  
残された勝氣の母の世帯振り。 里江  
母に似て祖母が氣に病む娘の勝氣。 牧東

佳

善人と言はれ勝氣の妻が居り。 笛水

した仕事さすが勝氣が光つて居。 曉鐘

嫁姑勝氣揃えの晩み合ひ。 緑松

負けられぬ覺悟長期へ吐を据え。 軟葉

父に似た勝氣が父に叱られる。 全

出所した勝氣が今の悔ひに住み。 次彦

さうですか妻は勝氣へ負けて置き。 春山

難局を妻の勝氣で切り廻す。 天眠

片假名が漸く讀めて言ふ理窟。 白雀

どんぞことなりて采配妻が振る。 竜耳

さかぬ氣の妻もめつきり年をとり。 晚香

軸

婿の明く返は帰らぬ腰を据え。

(スベースが少ないので評は畧します。)



第四拾五回川柳句會

課題「嘘」 田代藤枝選

方便で突差の場面抜けた息。

澤川巴水

地 都地丘上

言ひ通す嘘利次で勝となり。

人 河島次考

嘘を言ふ氣にはなれない世辭を抜き。

十客

荒んでる口から嘘がふつと出る。 笛水

合掌に虚偽の世界を暫く逃げ。 全

朗かに辻褄合せ嘘を説き。 奉君

氣休めの嘘も病人嬉しがり。 一流

嘘ばかり言ふて世間を狭く住み。 里江

へヤリシテ嘘は言へない血が通ぬ。 巴水

嘘迫も素直に聴いて勿れ主義。 全

友の文出る氣で嘘も交せて讀み。 孫六  
嘘でない証據に吐を割つて見せ。 天眠  
嘘にても正義に向ける奴なし。 緑松

前拔

十年も若く言はれて頭なで。

瓢池

中へ嘘も嬉しい若吏婦。

一流

デマニエース氣にしてばかり母の日々。

全

口達者嘘も半分交せて言ひ。

里江

變人に嘘言ふた夜の眠られず。

全

大見出し嘘も知りつゝ買ふニエース。

雀村

讀んで行く内に嘘だと知るニエース。

緑松

嘘だった後が氣になる帰り道。

丘上

嘘ついてひよいと寝られぬ夜の顔。

鳥城

お化出る嘘へ面白そつと寝る。

春山

経験に嘘は御座らぬ水瓜切り。

次考

嘘のない誠を神に手を合せ。

全

毒のない嘘が笑の種となり。

天眠

嘘だとは知れど真顔で聴くも母。

白雀



嘔吐いた真面目な顔が舌を出し。竜耳  
母の用醫者には行かず小買物。全  
宣傳へ嘘も交ぜて、ポンド賣る白米  
大繁盛にキヤンパ惱す嘘のデマ。江村  
訊問へヒョウケリと出た旨い嘘。五松  
嘘ついて子にせめらるゝ各の後。子守  
嘘言つた昔へふれる妻の愚痴。胡仙

### 軸

告口は事實と違ふ憤り。

難 詠 鷗湖 難波桂馬

やさしげに呼べは野猫も尾を立てる。

自轉車の背中がたい向ひ風。

汚す子の無いにルームの朝掃除。

全 此のリスト 野田鏡水

柵の中空を跳めて海を懸ひ。

薄化粧人が羞むのが加減。

夕散步懐かし詠り振り返り。

試歩する頬へ涼しい青葉風。

## 初歩添削講座

題「心」

島原潮風

△原作句 ○添削句

谷本晩香

△環境へ心悩ます子等の親。

○環境へ心悩ます子の親。

△もう決心の済みて毎日晝寝なり。

○決心がついて毎日晝寝なり。

△真心へ和解となりて酒を酌む。

○真心が通じ和解の酒となり。

北村子守

△子を持つて始めて讀めた親心。

○子を持つて始めて解る親心。

△座五を親の恩とするのがよいが、  
題が

心であるからそれでよろしい。

親に對してはよめたより「解ったがよし」

△此の心割って見せたい託住居。

託住居では意味をなさん。



○此の心割つて見せたいえ、悔し。

と詠んだら割つて見せたいが割る事が出来ないので悔しい事になる。

堀田瓢池

△身は寝床心に故山の墓詣で。

○身は床に心故山の親の墓。

△うつかりと心留守捨て大怪状し。

心が留守になるのはうつかりして居るからでせう。だから重複はさけて。

○とも角も心の留守は怪我のもと。

△慈悲心にうたれ尾をふる吠えし犬。

よく並べては居ますが、えでは文章です。

○慈悲心は吠えた犬にも尾をふらし。

△映画見つ心は隣の人に走る。

たつたす七字の中に詰められるだけ詰めがあります。文章ではありませんから。

○映画館心隣のシヤンにやり。(又は行き)

澤山詰め込まふとするから(映画見つ)と

和歌でも詠みさうな句調になります。

△一服の沈黙心さぐりあい。

○一服と煙草で心さぐりあい。

えもさうです君文章家だから文章其

まゝと川柳にするから(一服の沈黙)と云

うでせうが果して一服で心がさぐられ

るものかどうか。先にも角煙草を喫つて

それとなく心をさぐるのであらう。

△一服の煙に無想の心練り。

えも果して一服で無想の心が練られる

か。どうか。それなら無想より。

○一服の煙草に心忘れさし。

と極めて樂に口語体で云ふた方がよい。

△心竟氣手足の如く部下動き。

えも矢張文章。

○心はせ一つで部下もよく動き。

君は文章がよいから川柳の技法さへ解

すれば大家になれる事請合なです。



渡邊照女

△心情に泣ける祖國の慰問品。

貴女も文章家ですわ！ 心情に泣けるでも宣敷が、川柳は成べく（泣ける）とはつきり言はずに。

○心情に涙祖國の慰問品。

と詠めば泣いた事になる。

△憧憬に武運を祈る母心。

憧憬を据えろつは母親ですから（母心）と詠んだのでせう。之では何だか語呂がよくないやうですから『親心』と聲をとしては如何です。

津村汀村

△託住居心に餘裕強き生き。

貴君も文章家ですわ！ 之でよろしいですが盛澤山の様です。此句も見方では（強く生き）がとてもきいてゐて佳句の様に思はれますが私はどうも

文章じみて居るのが餘り好かん、それより

○託住居心の餘裕失はず。

○デマの中故國信じて強く生き。

此如く浅學の者にも判る様に詠んだの好きです。

夢山

森岡春山

△旨過ぎる詠夢かとからかはれ。

夢の課題で貴君のを落したから此所で添削します。此句も（からかはれ）と云つて終つてはいけくない。（あしらはれ）か（とりあはず）とした方がよい。

△氣にかゝる夢に一日ふさぎ勝ち。

之は添削の必要ありません。さうですが。

姓名あづかり

△長舌が女房が前の涼客。

貴女は文章はとても旨いですが、川柳は初歩ですから添削させて頂きます。此句は（長舌が女房が）と（が）が二ツ重つ



て、それで上五と中七の意味が切れる  
のです。それをたつた一字長舌の  
として御覧なさい續いて重ならず立派な  
川柳になります。

安井静女

△もどかし明あきらつてもらえぬ此の心。

(さ)では和歌でも詠むやうですから、(や)  
とした方がよろしい。

◎新進作家諸君去る四月號に書いた如く  
十二字の使い様一つで句の生死に係り  
ますから御注意を乞ふ。

◎添削は何時でもよろしいから送つて下  
さい。題以外の句でも添削いたします。

◎初歩の方は三方向きって、題、趣向、  
調和の三ツを使つて作句して御覧  
なさい。此の説明は次第に致します。

### 川柳と獨創

▲何事も文藝として獨創を尊ばないもの

はない筈である。殊に短詩型で而も人生  
詩に云はるゝ川柳に於ておやである。川  
柳が只五七五の字を並べて、人生一事傳  
乃至風景を詠む丈りで事足るものなれ  
ば、容易此上もない筈である。之は所謂報  
告に過ぎない。是で満足出来る中は  
まだよい。(以下次第に續く)

◎川柳峯土香五月號の川柳短評に、

誤解から誤りかくいる里の門。関五松  
之は只いふ山です。方言でも何でもあり  
ません書き方が悪かったのであります。

▲次回初歩添削課題

『勝ち』 成るべく九月十日迄に

▲次回川柳課題

『安』 全 送者未定 締切九月十五日

『有郎無郎』 全 全 九月十五日

『贈物』 全 全 九月三十日

『頑固』 全 全 九月三十日



本誌を毎拜御取次下さつて居る後援者諸氏の御芳名とその受持部落を掲げ、感謝の意を表します。

- 第二部落
- 第三部落
- 第四部落
- 第五部落
- 第六部落
- 第十一部落
- 第十三部落
- 第十六部落
- 第十七部落
- 第十八部落
- 第十九部落
- 第二十一部落
- 第二十二部落
- 第二十六部落
- 第二十七部落
- 第二十八部落

- 貴家まき子女史
- 藤本寅之助氏
- 玉岡貫一氏
- 安本時子女史
- 東彦太郎氏
- 柳本錦子女史
- 井上政次氏
- 角田常男氏
- 新貝富藏氏
- 出口泰造氏
- 稻垣牧東氏
- 大岡隆一氏
- 大森むつ女史
- 龍井謹平氏
- 大空魁氏
- 谷本晚香氏

- 第三十部落
- 第三十一部落
- 第三十二部落
- 第三十五部落
- 第三十六部落
- 第三十六圖書館
- 第三十七部落
- 第三十九部落
- 第四十三部落
- 第四十五部落
- 第四十六部落
- 第五十三部落
- 第五十九部落
- キヤンプII
- キヤンプIII
- 全

- 星野光葉氏
- 室富初枝嬢
- 江藤久氏
- 大池智慧子女史
- 棚本米史氏
- 鈴木胡仙氏
- 吉里竜耳氏
- 新野庄作氏
- 島原潮風氏
- 外川明氏
- 津村汀村氏
- 関五松氏
- 原田準一氏
- 岩切兵藏氏
- 古賀伊太郎氏
- 畑下治雄氏



## 編輯後記

○「いゝですね。藝術的な美しい表紙、肉筆で、まゝで親しみ深いオフセット版、それに充實した内容、戦時下の総合雑誌として上出来ですよ。願はくば戦後迄永久に残して。我々の生活記録としてよき思い出となり記念となるやうな、よい文獻を載せて貰ひたいものですね。我々の轉任所生活は總て消えて了ふのであるが、この我々の特異な生活をいつ迄も傳へるものとして残る最も貴重なもの、は雑誌ですからね。」と日頃尊敬して居る一先輩の御言葉である。

○七月號は好評噴々発行後僅か三日間で賣切となつたので、八月號は三百部も増刷したが、一部も残らなかつた。九月號は御覽の通り。先づ表

紙は貴家画伯の麗筆を以て飾られ、加ふるに進藤氏の藝術的なカッパ、九十頁を超える充實した内容。内容外觀共にかうした立派な雑誌が出来てゆく事は有難い事である。矢形前主幹から譲受た基本金と、稻垣牧東氏から拝借した資本と、合せて大枚百兩にまだ貳兩足りないお金を以て我等の雑誌は七月號以来発行を續けて居るやうであるが、後援者諸氏の御理解と御同情溢れた御支援に依つて、どうやら心配がなさ相である。が未だ餘裕が出来ない為、毎月用紙代を支拂ふ度「足りませんが」と會計亀重嬢に心配させるのが御氣の毒である。以上のやうな事情であるから、今後は各オフィス、圖書館、病院、療養所、サンタフェー、クリスタルセター以外の個人に對しては、誌代の御拂



込のない限り郵送しない事とした。  
御諒解を乞ふ。

○怒濤、鉄柵、高原（とつくに）ハ  
と山、文藝、北米短歌、山麓等、新舊合  
せて七八冊拝見して敬へらるゝ處が  
多かつた。何れも丈々獨特の編輯と  
内容で立派なものである。茲に敬意  
を表しておく。

○ミシガン州サリン溪谷の倉田波女  
史（元第四部落在住）ツリーレーキ  
の石川凡才氏、マンザナーの大場正  
名氏、第三の松村とめ子女史、藤井  
耕一氏、第廿八部落の谷本晚香氏、  
シカゴの矢形溪山氏、上記の諸氏よ  
り御寄附を戴いた。感謝の意を表す。  
○俳句が締切を二週間余すぎても来  
ないのて心配してゐた處、選者和氣  
先生御病氣入院中の由を承り、巴を  
と得ず、急いで『もはべ』から抜萃

させて貰つた。杜撰な点は、特に俳  
人諸氏の御宥恕を乞ふ。和氣先生の  
御快癒速かならん事を祈る。

○矢形氏より、大都會シカゴの某連  
鎖店夜間部支配人として御活躍中と  
の快報に接した。切に御健闘を祈る。  
氏より紀行を寄せられたが、本誌締  
切後だったので、次號を飾らせて頂く。  
○本誌印刷に特に力を盡してくれた  
山越昇君は美術學校入學の爲東行さ  
れた。御成功を祈る。

### ポストン文藝

第二卷 第七號  
一九四四年九月

編輯人

松原信雄  
有田百

發行人

島原潮風

印刷所

ポストン印刷所

發行所

ポストン文藝協會

UNIT I CITY HALL,  
POSTON, ARIZONA





*Cakes  
and  
Pies*



*Best Bakery*  
PHOENIX, ARIZONA

Vol. 2, no. 7  
Sept. 1944



COMPLIMENTS

from

NATIONAL GROCERY CO.

MESA, ARIZ.

Whole Sales

Quality Grocers



"MARUSHO"

The Best Shoyu -

SHOWA SHOYU BREWING CO  
Rt. 2, Box 51, Glendale,  
ARIZ.

昭和醬油醸造会社

アリゾナ  
グレンデール市



DEFENSE

*Poston Poetry Club*  
*Unit 1 City Hall*  
*Poston Ariz.*

